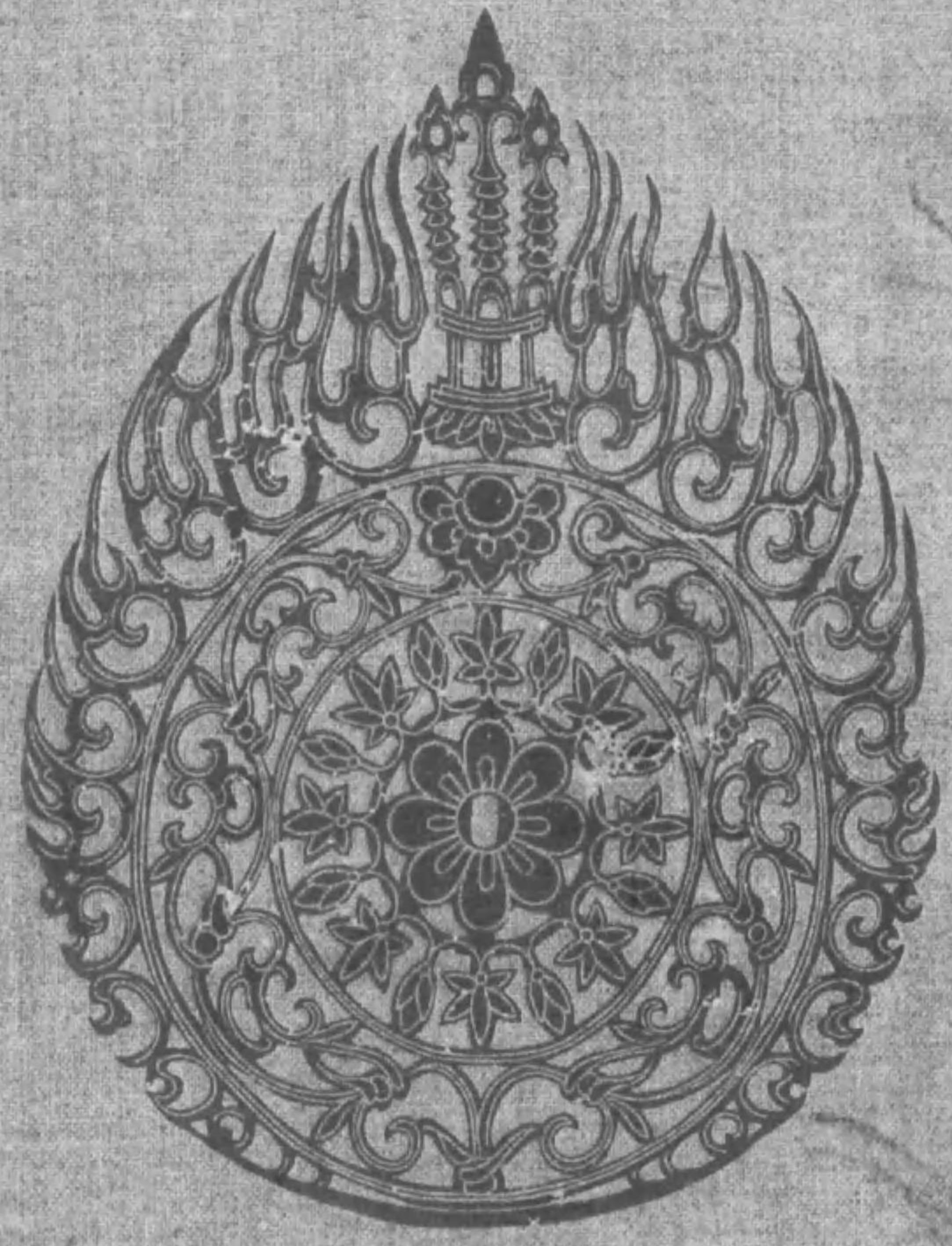


E708-N487



08
18

9
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15



始



85

E708
N48
(14)



興福寺大鏡

第一



| | |
|-------|-------------------------|
| 同版一〇五 | 東金堂 十二神將(彩色) 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一〇六 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一〇七 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一〇八 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一〇九 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一〇 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一一 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一二 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一三 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一四 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一五 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一六 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一七 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一八 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一一九 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一二〇 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一二一 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |
| 同 一二二 | 同 瓊珞羅大將像(彩色) |

| | |
|-------|------------------|
| 同版一二三 | 東金堂 四天王 持國天像(彩色) |
| 同 一二四 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一二五 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一二六 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一二七 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一二八 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一二九 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一三〇 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一三一 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一三二 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一三三 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一三四 | 同 增長天像(彩色) |
| 同 一三五 | 同 增長天像(彩色) |

南都十大寺大鏡 第四輯 興福寺大鏡第一冊解説

興福寺

皇極天皇の朝、蘇我氏の專横がその極に達すると、天皇の御即位四年中大兄皇子は藤原祖鎌足等と相謀つて蝦夷入鹿父子を誅し、次いで輕皇子を立て、大化の改新を遂げ給ふ。この事成るに先つて鎌足はこの大業成就の爲めに密かに發願して、丈六釋迦如來三尊并四天王像等を造る。天下定まつて後は皇太子中大兄内臣鎌足の輔佐によつて皇位安らかに孝德齊明兩帝相繼いで治世し給ふ。次いで齊明天皇即位七年皇太子御稱制後七年にして御即位のことあつて鎌足の功が將にその終を全うするや、聖己巳年病廢はこの老臣の身を養ふ。時に嫡女鏡女王はその延命を祈るために、その父の心願に成つた彼の尊像を安置する伽藍を造ることを請つたけれども、大原これを許さず、たゞその再三なるに及んでやうやくこれに従ひ、使ち山城國宇治郡山階に堂を造り、里名に因んで山階寺と言ふ。これ興福寺の濫觴である。

その年十月鎌足薨じ、次いで翌々年天智天皇も崩御、やがて起つた壬申の亂も定まつて天武天皇御即位のことがあり、即位元年都が滋賀國大津から再び飛鳥の地に遷ると、山階寺も亦従つて高市郡既取里に移り、よつて又既取寺と稱へられる。和銅三年平城京都のこと

がある、鎌足の子不比等は春日野の勝境、現今の地を相して、こゝに再び寺を移し、金堂造營のことあつて、名けて興福寺と言ふ。

本寺はこのやうな縁起から爾後藤原家の氏寺となり、やがてその氏家の奈良朝廷に榮えるまゝ、に元興、大安、樂師、東大等の諸勅願寺と相並んで時代に重んぜられ、又北圓堂(養老五年)東金堂(神龜三年)五重塔(天平二年)西金堂(天平六年)講堂(天平十八年)や、下つては南圓堂(弘仁四年)等の造立次第になつて、伽藍も整備、本寺は平城京の一大寺の觀を呈したのであつた。

その創立上に以上のやうな重い地位を時代史上に占める本寺は、宗教史上に於いても亦一宗根本の道場として著しい意義を有つ。即ち奈良朝に於いて有力であつた法相宗は大體前後四回に互つて將來せられるのであるが、その第一傳とせられる僧道昭によるものは本寺がその本流を承け守つて行くのである。さうしてやがて僧智通、智達、智風、智鸞、智雄等の同宗第二第三傳の後、天平七年歸朝の僧玄昉によつてその第四傳が行はれ、元興寺がこれを承け繼ぐと、こゝに興福寺は北寺南寺として各法相宗の二對流を守り立つ。しかも興福寺はその藤家との因縁によつて寺家繁榮するとともに法門また盛んなるものがあつた。

本寺は日本佛教史上になほ一つの注意せられるべき地位を有つて居るものである。それは本寺に行はれる維摩會に就いて、やある。興福寺の維摩會は藤原鎌足によつて起されたものであるが、彼の歿後、これを紹ぎ興す人なく、暫し中絶の姿となつては、三十年を過

きたが、持統天皇の朝になつて不比等がこれを再興し、毎年十月にその法筵を開いて皇運と佛法との隆昌と天子の聖靈、一門の英魂の冥福とを祈る習としたのであつて、以後藤氏の繁榮とともに永く傳承せられた。さうしてこの維摩會は毎年正月に宮中に行はれる御齋會、三月に樂師寺に行はれる最勝會とともに佛教の年中行事中最も重要なものであつて、僧侶はそれ等の講師を経た後に次第によつて僧綱に列せられることとなつて居るのであり、加之その三會の講師中では維摩會の講師を最初に相勤むべきもので、謂はゞその講師たることは恰かも僧侶の登龍門であつた爲めに、本寺はこれに従つて特殊な地位を占め、その地位からして自然に大きな勢力を有つこととなつて居たのである。

本寺の藤家の氏寺としてのこの縁起の爲めに本寺はその氏家と榮枯をともにするのであつて、人は本寺の盛衰に藤氏のそれを鑑るであらう。この故に本寺々々の興隆は天平の代と平安の中世とをその最とするのである。殊に平安中世、それは藤原時代とさへ呼ばれて、歴代の氏の長者が攝關として廟堂にその榮華を極めると、興福寺またその威を海内に振ふのである。さらに言へば藤家が王家とその勢を競ふやその政争の渦中に入り、佛寺所謂僧兵を蓄へる時潮に乗つて、藤家の氏神春日社と結び、事を構へては神輿を擁して、或は入洛屢々朝家に喧訴し、或は勅願の寺東大又延暦の僧兵と闘ひ、天下を横行し人心を脅やかし、佛法いつしかその域を去らうとするの觀さへ呈するのであつた。

原不比等の奉爲めにその忌日養老五年八月三日に造つた彌勒淨土變相像等とを安置して居たのである。

中金堂は永承元年十二月廿四日焼失、同三年三月二日建立、康平三年五月四日焼失、治暦三年二月廿五日建立、永長元年九月廿五日焼失、康和五年七月廿五日建立、治承四年十二月廿八日焼失、建久五年九月廿二日建立、建治三年七月廿六日焼失、正安二年十二月五日建立、嘉暦二年三月十六日焼失、應永六年三月十一日建立、享保二年正月四日焼失等の興廢の歴史を有つ。現今はこの中金堂址のやゝ後方に文政二年に建立せられた假堂とも呼ばれるべき本堂がある。その須彌壇上中央に丈六釋迦如來坐像を安置し、その左右に阿彌陀如來、千手觀音、藥王、藥上、諸菩薩、梵天、帝釋天、四天王、及吉祥天等諸像を置く。退轉した諸堂の尊像が相會して居るのである。

須彌壇上更に一段の壇を構へて居す本尊釋迦如來像は金堂の本尊、本造丈六の坐像であつて、應永年中藤山忍庵の作と言ふ。最初の釋迦像は永承の火には取出したと言ひ又定朝これを繼ぎ作つたとも傳へる。或は彼の修補にその命を承らへたのであらうか、さうしてこの像は康平に焼け、治暦に覺助作り、康和の頼助の遺像、建久の明圓の遺像、相繼いで最後に現在の像となる。現今も本寺中樞の尊像、その佛體、光背、臺座よく古式を汲んで整備、これを行ふに謹嚴、またその時代彫刻中の代表作たるべきものである。

三 金堂鎮壇具

平安朝の末源平亂を争ひやがて源氏の世となるまゝに藤家の勢次第に傾けば、興福寺の繁榮また昔日の影を没し、その同縁の奥の度々(元慶二、寛仁元、永承元、同、四、康平三、寛治二、同、三、嘉保三、永長、治承四、仁治二、建治三、嘉暦二、應永十八、享祿五、享保二年に伽藍やうやくその舊觀を失ひつゝ行く。とは言へ本寺がこのやうに前後十數回の炎上の厄に遭つて居ると言ふことは再興も亦屢々行はれたと言ふことを示し、この事實は本寺が近世に到るまでほゞ千三百年間不斷の相家の氏寺であつたと言ふことに因るのに外ならないのである。この故にこそたとひ正當にも人は今その伽藍の礎石に立ち、境内の規模を繞つて、その昔時を憶ひ、その十に九を失ふ程に長歎息しようとも、南都の古伽藍多く次第にその廢滅を遂つて行く間に、東大寺と相並びつゝ、今もなほ南都隨一の寺門として立ち、法相宗根本の道場として佛教史上に重要な地位を占めて居る。

一、二一 木 堂 外観 堂内光景

猿澤池の北、石階を上つて南大門の跡を引ひ、右に五重塔、東金堂、左に南圓堂を見て北に進めば、芝地一段高い所に礎石が散在して居る。中金堂の跡である。堂は本寺根本の中堂、即ち銅三年鏡女王によつて建てられたものであつて、本寺の古記は傳へてその長十二丈四尺、廣八丈東西に廣さを備へて居たと云ふ。往古堂内に鋪足公念持の長三寸の銀釋迦像をその白毫に納めた本寺瀧船の本尊丈六釋迦如來並に脇侍菩薩、四天王、十一面觀音菩薩二體と、橘夫人がその夫君藤

明治十七年三月金堂土壇中央から發掘され、その鎮壇具かと考へられるもので、銀製の鏡十箇及び水晶玉十一顆である。圓版中前列中央のものは底やゝ平に圓廻りやゝ立上りが急で、厨の中頃に一本の圈を圍らして居る。鏡金があり、その外部は細かい魚々子地に毛彫で輕妙で而も強味のある蔓狀寶相花及び靈鳥を現はして居る。内部には文様はない。半程缺失して居るのは甚だ惜しい。この鏡を挟んで左右に列んで居るのは共に外形はゞ弧形をなし、鏡金を施し、その外面にはこれ又魚々子地に蔓狀寶相華を毛彫にする。その文様は前者のものよりは餘程豐麗な趣を有つて居る。内面には文様がない。餘の七箇の鏡は鏡金がなく、又無地である。水晶玉は圓に見る如く大小あり、又穿孔のあるものもないものがある。その出土の儘からしてもその刻みつけた文様からしても本寺金堂の現地に於いての建立の年和銅三年をもつてその製作年次を指示するものと出来よう。

四 寺 印

銅製 印四方 二寸許 高 二寸四分

本寺の古印でその印文書體、鈿の形などから平安朝中期のものと思われる。

五 金堂 吉祥天女像 正面

木造 著色 倚像 像高 二尺一寸四分

全形 背面版板繪
扉繪(帝釋天)

今金堂壇上に安置してある。寄木造で圓版でも明らかなやうに全面に緻密な極彩色文様を描いて居る。花冠、胸綴、光背は銅鍍金、臺座亦極彩色で、その最下重板の裏板に、興福寺金堂御本尊吉祥天女、御衣木加持并開眼供養導師招提寺第十代長老慶圓繪所大佛師法眼命尊、木所大佛師寬慶、奉行僧招提寺知事慶朝、曆應三年庚辰五月晦日供養畢、同六月一日自招提寺奉入興福寺の墨書があつて、本像の製作等を明らかにして居る。吉祥天像は古來極めて華麗な粉飾を施されて居るもので、その各像に自らその時代の裝飾趣味を窺はしめることゝなつて居るが、これまたその細密にして工藝的な手法によく鎌倉時代末葉の好尚を表はして居ると言へよう。像を納めて居る厨子また同時代のもので、正面の扉内面に吉祥天の脇侍として梵釋二天を畫き、像の背後に當る版板には七寶山とその上に五色の雲に乗つて鼻に瑪瑙の珠を持ち、その内から種々寶珠を出して吉祥天の頂上に灌ぐ六牙の白象の鬘を現して居る。像に於ける彩色文様も同作者の手に成つたものか。こゝに繪所といへば春日繪所なるべく、この像と厨子との彩繪を見てまた然か考へ得る所からして、その製作年記者の明らかなのであるだけに珍重すべき像具である。さうして題記に於いて既に繪所大佛師命尊が法眼位を有つて居て木所大佛師寬慶に比べて威を示し、先つてその名を列して居る如く本像またその繪佛師の巧技に於いて賞せられるべき製作

である。

本堂 四天王像

木造 著色 立像

九 持國天像

像高 六尺六寸六分

一〇 增長天像

像高 六尺三寸二分

一一 廣目天像

像高 六尺八寸四分

一二 多聞天像

像高 六尺四寸二分

今須彌壇上を守る護法四天王像で、寺記に建久年中に金堂造立の時につられたもので定慶作と傳へる。右掌に寶珠を捧げ左手に刀を執るは東方持國天王、右手に高く執、左手に刀を有つは南方增長天王、右手に索を握り左手に戟を持するは西方廣目天王、右手に寶塔を捧げ左手を戟に安めるは北方多聞天王、各軀身を甲冑に固め足下に邪鬼を踏む。裝身具滿面の彩色文様もよく凝つて居る。その容姿は體軀太く、總じて作者の志す所は莊重にある如く、鎌倉期のものは多く寧ろ輕捷を旨とするのに對して異様に見られるであらう。このことに就いてはいふ／＼考慮せられるところがあるが、わけてもこの四天王を本寺東金堂等の本像より古い本寺の四天王像と比べ考へる時それ等のものに於いて通じて見られる莊重な風姿が自ら

と言ふよりは寧ろ志あつて依據とせられたものと思ひなされるのである。さうしてそこに本寺の彫刻に於ける傳統を見て、本像の特に興味深く見られる所にも存するであらう。殊に東金堂のもの本冊第一二三—第一三二圖にはその形容酷似し、本像は彼を範として作られたものと考へられる。さうして兩者を比較すればその間に各時代の手法の相異が面白く見出されるであらう。

一三、一四 本堂

梵 天 像 正面

帝釋 天 像 正面

(舊東金堂安置)

木造 著色 立像

像高 梵天 五尺五寸 帝釋天 五尺七寸

今本堂本尊像の前左右に安んずるがもと東金堂のものである。その形よりもまた彩色よりも蓮月の妙を發揮しようとするあたり、その隅々までも行き互つて居る刀法一つで一地の木材を顔や手の肉、衣の柔らかなさに觀察して行く様にはよく鎌倉時代の製作であることを語るものがある。而も梵釋二者の間に多少手法を異にするあり、その作者を異にするかと思はしむるところがある。さうして東金堂十二神像本冊第八—第九四圖と作技相通ふ處あるかに覺えられる。

一五、一六 本堂

藥王菩薩像 正面

藥上菩薩像 正面

(舊西金堂安置)

木造 著色 立像

像高 藥王 五尺九寸 藥上 五尺七寸

玉眼を嵌め金箔を押す。今本堂須彌壇上にあるがもと西金堂の本尊釋迦如來像に侍立して居たものである。西金堂は天平六年光明皇后が先妣橘大夫人の往生菩提の奉爲めにその忌日正月十一日を選んで建て給つた所で、健陀羅國佛師問答師の作と傳へられる丈六釋迦如來三尊と十大弟子八部衆、梵天帝釋天四天王等諸像を安置して居たのであつたが、災火の爲に興廢相次ぎ、享保二年五月の大火を最後にその跡を絶つて居る。今金堂址の西方南圓堂の東方にその址あり。

木造 漆箔 立像

像高 各一丈一尺九寸五分

今西金堂の諸佛多く本堂に安置してある。この藥王藥上兩菩薩像は建長再興のもの、各その像内に銘記のある木札を納め、それによつて製作を明らかにして居る。藥王菩薩像内にあるものは板の一面には未敷蓮を附し、その内に紙本墨書寶篋印陀羅尼經と紙本墨書顯文二枚とを入れて居るので、その顯文は其一に「西金堂脇土 藥王菩薩像 依法師千榮 發起勸進力 爲宗有婦女 七世四思等 合離苦得樂 所奉造立矣 結緣貴賤衆 自他法界類 願超生死海 速昇菩提岸」其二に「藥王菩薩像 法師宗有顯 尼慈氏寂蓮 大 中臣姉子 阿波田牛若 阿波田明王 阿波田滿若 阿波田吉祥 阿波田閉若 現世安穩願 後生善所願 安養淨土願 爲所願成就」とあり、この板の他の面には山吹に鳥の文様の圓鏡を嵌め込み、その上を他の板で蓋つて居る。その鏡の表面には梵字一字を鏡の上

方の板面には梵字二字を並記し、鏡の下方の板面には「阿彌多羅三藐三菩提 建仁貳年八月 廿日春氏敬白」を四行に就れも墨書する。藥王菩薩像内のもとは同様のもの、異なる所は額文には「西金堂脇上 藥上菩薩像 依法師千榮 發起勸進力 爲定許中子 七世四恩等(以下略)」と記し、鏡の裏面の文様は梅花と鳥であり、鏡の下方には「建仁貳年 九月六日 願主 大中原姉子」と認め居ることであり、又この像の左足の納には「本修補 繪所大佛師 觀賢 正應元年八月」同右足の納には「施主 大法師憲有 延應 大法師憲寛(以下略)」と就れも墨書する。

願主春氏、大中原姉子、法師千榮、宗有、尼寂蓮等に就いては今述かにこれを明らかにし得ないけれども、この時は治承の大火の後を承けて攝政藤原兼實、基通、良經等が説意寺家の再興に盡力した時であつて、この大勢の内に遺像に於いては運慶、快慶、定慶、湛慶、院尊の諸師相説つて腕を揮ふことゝなつたので、本像亦この間に成つたものである。とは言へ今述かに本像の作者を誰と求め得ないが、その一足を軽く息めて立つ御姿、御顔と手、さらには衣文に現はれた暢達の彫技によく一に古式を汲み乍ら他に寫實的手法を示したこの時代の新風の特徴を見る。足納の墨書に言ふ正應元年八月の修補は思ふのこの年に先だつ十一月、建治三年七月廿六日南都に地震があつて、興福寺諸伽藍に災した時の破損に關するものであつて、現今の蓮座はその修補によるものであらう。なほ觀賢はこの後同年十月に大佛師善増と共に同じく舊西金堂安置の金剛力士像本冊第五四―第

五八圖を修補して居て、この時の興福寺諸像再興にその功の少なくなかつたものである。

本堂 十大弟子像

(舊西金堂安置)

夾紵 著色 立像

一七、一八 舍利弗像 正面 右側面

像高 五尺五分

一九、二〇、二一 目健連像 正面 背面

像高 四尺九寸一分

二二、二三、二四 迦旃延像 正面 背面

像高 四尺八寸

二五、二六 須菩提像 正面 背面

像高 四尺八寸

二七、二九 富樓那像 正面 背面

像高 四尺九寸三分

三〇、三一 羅睺羅像 正面 上半身 背面

像高 四尺九寸

この十大弟子像は後出の八部衆像と共に西金堂本尊釋迦如來像に脇侍して居たものと思はれる。西金堂は光明皇后が御母贈從一位縣犬養橘三千代夫人の往生菩提の爲めにその一週忌日である天平六年正月十一日に建立せられた所で、釋迦三尊像を本尊とし、これに十大弟子、梵天、帝釋天、四天王、八部神王等諸像が賑やかに侍立

して壇上を莊嚴して居たのであつた。爾來星霜の重なる内にその堂は滅び、それ等諸像も相次いで失はれて行つたのであるが、その内釋迦說法聽聞の衆たる十大弟子及八部神の像は不思議にも遺つて居るのである。たゞ十縣の内今寺に存するのは舍利弗、目健連、迦旃延、須菩提、富樓那、羅睺羅の六軀のみ。八部衆像とは同じ夾紵像であり、勿論その大きさも俱合ひ且その瘦せきすな肢體硬直な容姿や面貌即ち顰めた眉、太い脛の目鼻梁が尖つて細く小鼻が甚だ小さく、如何にも小ぢんまりとした鼻、味やいて居るやうな唇など酷似して居て同作なるかに判せられる。なほ言へば滅びにそれ等の像も同じに補りなく、つくねんと棟立ちになつた姿勢瘦せ乾びた體相は兩像獨得なものであつて、而もそこに如何にも清楚な趣致の滯ふあり、先づ人の心に深く銘し、而も永く腦裡に遺る。更に注意すべきはその面貌で、その目鼻だちに就いては既に説いたが、現存像に於いて須菩提を除いては多く老人の相に作りか、の八部衆に大體童子の表情を與へたのと對照するやうにして居るのも面白く、更には細やかな技巧を用ひず、さうして用ひなかつたそのために表情に——殊に眉と目唇と口元に——よく生き／＼として何事かを語つて居るかのやうに感せしめ、像に千古の生命を與へて居るのが實せられる。又各尊者の袈衣の褶ひ方に變化を與へ、その相異に従つて各々相異つたさうしてよく寫實と寫意とを兼ね得た撰文を現はして居る作者の苦心と技巧とに氣付くが、その鬚眉が面貌の圓やかに柔和なものに於いては數も少く又細やかに、眉を顰め枯瘦の相をなすものに於いて

は數も多く、又太く作つてそこによく表現形式の統一を與へて居るのが讚歎せられる。かく説いて來ればこゝに運慶作なる本寺北圓堂無著世親像が思ひ出されるのであつて、かの像の造立にこの十大弟子像が甚だ寄與する處が多くなかつたらうか。まことに運慶によつて實に巧にも本像はかの二祖像に體案されて居ることを思ふ。さうしてその容姿にまた技巧に東大寺法華堂夾紵諸像と相近い處があり、天平盛期のものに於いて見る圓熟には未だ至つて居ないところがあり、その點からして西金堂建立の天平六年をもつて本像造立の推定年次とすることが出来るであらう。尙この一組の十大弟子像中寺に殘りこゝに載せた六體以外のものについては、その内一體は明治年中寺から坊間に出で、大倉集古館に傳つて居たが大正大震災に於いて焼失し、又その一體のものであるといふ像心木が東京美術學校に藏せられて居る。その他のものは全く破滅に歸したのである。又本像並八部衆の傳來についてはもと額安寺のものであつたといふ寺傳があるが、遽かに信據し難く、寧ろその所傳は本像等には附す可らざるものと考定せられるであらう。因に本像等と共に西金堂本尊に脇侍して居た夾紵梵天、帝釋天像も今坊間に傳へられて居る。それは多大の近年の補作を交へて居るがこの十大弟子並八部衆と同等と鑑せられるものである。本十大弟子、八部衆等像を額安寺古像とする所傳に據り難い點はこゝにも存して居る。

本堂 八部衆像

(舊西金堂安置)

夾袴 著色 立像

三三三、三四 五部 淨像 左正側面

像高 五尺二寸七分

三五、三六、三九 沙羯羅像 正面 背面

像高 五尺〇七分

三七、三八、四〇 迦樓羅像 正面 右側面

像高 四尺九寸四分

四一、四二 鳩槃荼像 正面 上半身

像高 四尺九寸五分

四三、四四 阿修羅像 正面 背面

像高 五尺四寸五分

四六、四八 乾闥婆像 正面 背面

像高 四尺九寸二分

四九、五一 緊那羅像 正面 背面

像高 五尺二寸九分

五二、五三 畢婆迦羅像 正面 背面

像高 五尺一寸五分

前出十大弟子像と共に本寺西金堂群像に侍立して居たもので、彼と同伴と思はれる。八部神とは天龍夜叉阿修羅迦樓羅乾闥婆緊那羅摩睺羅迦を言ふので、現在寺では天を五部淨龍を沙羯羅夜叉を鳩槃荼と名け摩睺羅迦は畢婆迦羅と呼び傳へて居る。八部衆の彫像は奈良朝で大安寺、法隆寺等に於いて、又本寺に於いても他に中金

堂、五重塔に於いてその造立の數例を見るが、現存するのは法隆寺塔本涅槃群像中のものと本寺のこの像とで、爾後のは全く遺らず、かくてまことに本像は珍重すべき遺品である。像は八軀の内五部淨居天はその上半身を存するのみ、その他のもも頭頂手首指先等に缺失部あり、古記によれば貞永元年に修理が加へられ現在の文様の著色等は大部その時のものらしい。又近年古社寺保存法によつても修補せられたが、それは大部には及んで居ない。八軀の内阿修羅が三面六臂で甲を著けず、僅かに腰に裙を纏つたのみの裸形である外他は皆身を同様の甲で固め、何れも同じやうな直立の姿である。孰れも頭部と上肢とにやゝ働きこそあれ、その他は殆んど動きのない直立の姿で、而もその容姿が如何にも硬直で、前にも記したがその股體のプロポーションと共に天平五年の作と謂はれる東大寺法華堂四天王像、和銅年製作の法隆寺塔本八部衆像等とよく似た處がある。その全形や部分例へば各像の頭部や阿修羅の股體、裙子などに於いて未だ圓熟しない點が認められるであらう。その相互に變化のある相貌も興味深く眺められ、その纏めた眉、賢しげな目つき、小作りな鼻などには素朴な表情があり、その體軀の小柄な細やかなことと共に恰かも小兒の姿、畢婆迦羅は遠ふがによつてこれを現はした志も面白く、さうしてその面立に又活き／＼とした趣致の存し、又何處となくユーモアの漂ふところあるなど本像の生命なるかに思はれる。なほとりどりの姿に就いては、淨居天、沙羯羅は乾闥婆と共に相貌

に子供つはい素朴なところあり、獨り忿怒の相を成す鳩槃荼は四天王に踏へられる夜叉に於けると同じく、これにもその顔の表情に何とはなくユーモラスな感じあり、迦樓羅と共にこの群像全體にさうした面白い表現内容を與へるものとして大切な役割を勤めて居る。迦樓羅に就いてはその鳥頭——伎樂面の如うな——にして甲を着けた所にこれにもユーモアがある。阿修羅はその如何にも瘦せて而も謂はゞ標骨な趣のあるのが目に付く。ちつと見つめる眼文なす如うな六本の手には怪訝な表現がある。一角三日の緊那羅はその顔かたちとことななくもの怪しく、或は氣味悪い一種獨特の表情に創作的な趣致がある。畢婆迦羅は既述のやうに子供つは顔のものゝ多い内に獨り老相に現はされて居るが、目鼻だちや唇の象形などの年老けた有様が面白く現されて居る。乾闥婆はそのちつと閉す目と脚頭の炯々と光る眼とに面白い對照あり、眼目の大きく見開くにつれて眼目の細々堅く閉すを思ひ、やがてそこに深く潛め細やかに調へられる心あるを思ふ。

五四—五八 本堂 金剛力士像 阿形正面 呼形正面 阿形左側面 呼形左側面 阿形背面 呼形背面

(舊西金堂安置) 水造 著色 立像

像高 五尺三寸七分 呼形 五尺二寸三分

もと西金堂に在つたもので、玉眼嵌入身は胡粉地に淡い朱を塗つて肉色を現はし、裾には朱、綠、青等で中に伽陵頻伽を抱いた寶相華丸

紋唐草文雲文を描き、縁には金箔を押して居る。阿形像では右手第五指と左足先呼形像では右手腕が缺失して居る。大正四年本像修理の際に體內に修理記のある紙片が発見された。即ちその文に西金堂 本修復二王施主合力之内 權少僧部英禪大律師 呪師大律師 專藝摩房 後見大律師 覺堂 學房 等也 本大佛師善增君見之 繪大佛師 繪師 漆工 寄人 等六人 正應元年九月十四日 執筆僧信專房 正應元年戊子十月十日 修復西金堂と言ふ。この正應修復のことは夙く興福寺遺跡記に記しても居たのであつたが、これは建治三年七月廿六日南都に地震があつて、本寺は爲めに火を出し、金堂講堂共に灰燼に歸した時、西金堂は幸に火災はこれを免かれたのであつたが、震災を被り、本像また破損した爲めによるのであらう。この修理がどの程度のものであつたかは本像の製作の時がこれよりさほどに上るものでないこともあつて、今これを明らかにし得ない。たゞその震災によるものであり、體內に修理記のあることを以てすると、その際解體されたのであるし、相當補作もせられたかと思はれ、又繪師が加つて居るので見ると現存の著色や文様はかなり入手もあつたことであらう。今その兩像を見るのに、一體は開口や、伏視して、瞋睨、伸臂した右手と臂を後に高く衝き行つた左手とは胸を思ふ限り開いて相張り、腰を左に激しく屈した勢に右足は踏み出して勇躍し、又裾の裾はうち靡く、一體は口は閉ぢて左方や、遠きを瞰んで、瞋睨し、同じく兩手は相張り、思ふ存分に衝き衝き出した胸はまた肋骨も露はにして

滿身の力をこゝに籠める如く、腰以下はこの勢を保持するに止つて居り、前者の力を張るのに対して寧ろこれを藏するかである。金剛力士像に於いての阿吽のこの對比は通則となつて居るのであるが、この兩者相通じてその怒張の度奈良平安兩朝のものに比して強く、そこに甚しい誇張がある。そこに鎌倉期のものゝ特色が存するのであつて、本像の如きはその點に關して最も典型的のものと稱すべきである。たゞ同じ意味に於いて考へられる東大寺南大門の二力士像等に較べると更にその怒張の度を加へ、あまりに怒つて寧ろ行き詰つた感さへ致されて居て、いゝ一歩にしてその命の危きことさへ思はれるのである。またその刀法に就いては一見直ちに成せられる如うに、その棟連の技に於いてその材質をよく筋肉に成は布巾に翻譯し、又その形を整へて所謂寫實の功を遂げて居る。この技は夙々天平の代型像に於いてまたこれを成し得て居たのであつたが、本影に於いては鎌倉期にその結果に到着したもので、而も型像に於いてよりも遙か意味に於いて緊密に形に於いて細密に行はれたのであり、さうしてそれは筋力怒張の金剛力士像に於いて、而かも東大寺南大門のそれの如うな大形のものよりも本像のやうな小形のものに於いて殊に遺憾なく現はれるのであつて、その意味に於いて本像は日本彫刻史上甚だ興味深い注意すべき作品である。

この二像傳へて定慶の作と言ふ。定慶は鎌倉時代の始本寺にその技を振つた者、彼の作品である龍燈をその體内銘に有つ維摩帝釋天諸像また本寺に藏せられて居る。それ等に較べて見て直ちにこ

の所傳に左相することは難く、定慶像はその衣文が多く並行して作られ、その整頓なり統一なりを缺く傾あり、その點は本寺南圓堂の法相宗六祖四天王諸像等の康慶のものに似て居る。然るにこの二王像ではその衣裝は並行することを全く避けて設けられ、極めて變化多く縦横に走り、さうしてその壁は幅廣な彫らみも見せるが又屢々細く線立つて居り又處々に抓み掲げられたやうに凸出した裝を作るなど定慶像に類して居ない。さうしてその肉身に於ける手法がその張りのある筋肉を作るのを特徴とする運慶派康慶圓の一流に類する如く、この衣裝に於ける作風またかく考へられるべきものであつて、よつて試みに類似した製作を求めて見れば、もと本寺に藏せられたと云ひ今小泉策太郎氏に藏せられ銘記によつて康慶作とせられる騎獅文殊菩薩並吞屠像が殊にその吞屠像に於いてこれを求め得る。併しこれによつてこれまた直ちに本像を康慶作となし得るものではないが本像に就いて考察するに當つて今一つの憶説を提出して見ようと思ふのである。

五九一六一 本堂 天燈鬼像
龍燈鬼像
(舊西金堂安置)

本造 著色 立像
天燈鬼右斜面 龍燈鬼右斜面 天燈鬼正面
龍燈鬼正面
全高 三尺二寸 龍燈鬼 一尺二寸八分
龍燈鬼 二尺四寸四分五分 龍燈鬼 一尺四寸
龍燈鬼 二尺五寸三分 龍燈鬼 一尺四寸

もと西金堂に安置してあつたと言ふこの天燈鬼龍燈鬼像は興福寺雜錄の記載によると、その龍燈鬼像の内部に願主大律師聖勝生年五十一 建保三年卯二月二十六日 編百量（聖勝）の墨書があると言ひ、天燈鬼像また同作と考へられる。これ以外には彼の製作は他に確證のあるものがない。康辨は運慶の第三子、七條佛所第十代法眼にまで叙せられたと言ふ。

二體ともに寄木造、玉眼嵌、彩色は今僅かに凹處に胡粉地を殘すのみで多く剝落して居る。龍燈鬼は頭頂に六角燈籠を載せ肩銅板製を立て、上を仰ぎ拱手したその右の手に身體に絡まる龍の尾を握む。肩に布を纏ひ腰に袴を穿くのみ、裸體で兩足等しく左右に踏まへて重心を直下に落とす。この左右均整の姿勢と異つて天燈鬼は燈籠をその左肩と左手とで荷ひ又挿げ、頭部は燈籠を避けて右に倚り、腰を左に捻り左足に重心を落とす。右手を外に張つて釣合を取らうとし、眼は上方を斜視する。兩鬼の姿勢にかく對比がある如く、口は金剛力士像に於けるやうに阿吽の對比をなし、頭髪は狛犬に於けるやうに巻くと然らざるとに別けずべて一對のものとしての工夫をして居るなど、他に全く例を見ない形像であるに就けても作者は相當の工夫をして居る。燈籠は二つ乍ら後補のもの、龍燈のものは殊に新しい。

この像を造立するのに當つて作者の最も注意した主なことは恐らくどのやうにして燈籠を安定に保ち、而も重々しく成じさせようかといふことであつて、作者はこの爲めに先づ二鬼をその燈籠に比

べて小形にし、又如何にも太短かくし、その手と足、殊に手首足首を甚だ大形に作つて居る。さうして身體四肢のこなしを然るべく形つた上にその鬼の表情に一工夫を凝らし、その如何にも諧謔的な又人を嘲弄したやうな容子で、その頭に又肩に載せる燈籠は如何にも重いが落しはしないぞといふやうに思はせて居るのが面白い。その刀法必しも密ならず、前に見た金剛力士像に於いてのやうな棟連の彫技はこゝには見られないが、この獨得な形像をかく巧に又面白く作り出したその巧技はまことに稱讃に値する。この像によく人の注意を引いて世に喧傳せられる所以である。

六三二六八 本堂 華原 磬
全形 金鼓 龍頭側面
龍尾側面 龍頭正面
獅子

諸寺縁起集所採の本寺縁起の西金堂の條に本尊附屬の法具として記すもの、又七大寺巡禮記本寺條同じく西金堂を記す處に
金鼓一口徑八寸許、存、以之用、鑿件金鼓者在正面之壇下、又波羅門立像高三尺許也、件像立於金鼓之傍、執持木表打金鼓之勢也、とあるその金鼓は即ちこの現在寺で華原磬と呼び傳へて居るもの

全高 三尺二寸 龍燈鬼 一尺二寸八分
龍燈鬼 二尺四寸四分五分 龍燈鬼 一尺四寸
龍燈鬼 二尺五寸三分 龍燈鬼 一尺四寸

全高 三尺二寸 龍燈鬼 一尺二寸八分
龍燈鬼 二尺四寸四分五分 龍燈鬼 一尺四寸
龍燈鬼 二尺五寸三分 龍燈鬼 一尺四寸

全高 三尺二寸 龍燈鬼 一尺二寸八分
龍燈鬼 二尺四寸四分五分 龍燈鬼 一尺四寸
龍燈鬼 二尺五寸三分 龍燈鬼 一尺四寸

と思はれる。華原管とは管石の名産地華原から出る管の意で、それをこの石造にも非ざる金鼓に轉用したものであるべく、文献通考に今釋氏所用銅鉢亦謂之管とあるのもつて見れば、この轉用には古い習がある譯である。本寺に又洞窟管と名けて傳へるものあり、洞窟管は華原管と並ぶ名管であることから、本寺に傳つて居ること二つの管に何時の頃からかこの名管の名が分ち付けられたのであらう。又金鼓を打たうとする波羅門形遺存せず、但し今本寺に山田道安作で妙轉菩薩と言ふ波羅門形の本像があつてこれに代へて居るが附屬して居ると言ふのは、金光明最勝王經夢見金鼓儀飾品に記す所に協はしめようとの意かと思はれる。即ち妙轉菩薩が佛に妙法を聞いて後夢中に大金鼓が日輪の如く光明照耀し、その光中に下方無量の諸佛が寶樹下琉璃座に於いて無量百千大衆の圍繞せる内に說法せるを見、又一婆羅門が手に棒を執つてこの金鼓を撃てば金鼓は大音響を出し、聲中微妙妙他明徹佛法を演說するを聞きたる由を説いて居る。これを置いて居た西金堂本尊釋迦には十大弟子及八部神王等が說法聽聞の衆として圍繞して居たのであるから、それ等の群像と共にこの金鼓が儀飾品に説く所の佛の妙法の音響を撃ち出す金鼓として佛前に備へられたのであらう。

さて管は圓に見る如く謂はゞ鼓架を四龍で形つた御得の構想のもので、四龍は相並ぶ双龍二組となつて相對し何れも尾を相絡み合ひつゝ又一本の六角柱に絡み著けて立ち上り、組々腹と腹とを相對し、背を弧形に反らし、組々前肢をもつて相抱き、四龍共に頭を括つものに芳り、又式上から製作時代の華原期以降のものなるかを思はしめる。

六九 西金堂 燈籠

石造

西金堂の地にもと堂前に獻げられてあつた石燈籠一基を遺して居る。その形細長く、やゝ力と量との感じに缺け、寧ろその花車な姿が人目を引くが、火舎外部に浮彫とした天人が更にその姿を美しくして居る。東大寺大佛殿の燈籠火舎に天人を現はして居ることがこゝに影響して居るかにも思つて興味深く、火舎受座に輪寶を現はすことはまたこの燈籠に於ける一案である。最下重六角座の縁の香狹間の幅幅形であるのも注意すべく、製作はそこにも鎌倉期なることを明示して居る。

七〇 本堂 阿彌陀如來像 正面

本造 漆箔 坐像

像高 一丈四寸八分 坐像高 三尺六寸

本尊の西側に安置してある。もと講堂の本尊であつたので、寺記に建久年中院尊の作と言はれるものと推定せられ、その堂の享保二年炎上の際火中より救ひ懸らせてやがて本堂に安置せられたものである。講堂は天平十八年正月、不比等の子武智麻呂の女が同じく武智麻呂の子仲麻呂とともに先妣の本爲めに建立したものであつ

て頭を相そむけ、眼目開口忿怒する。前記本寺緣起文中に龍形含玉各一貫とあるが今その玉は見當らない。又前肢に一圓板を挿ぐりあり、桃記にこの上に寶珠を載すべき由を説いて居るが如何。又龍尾の絡む六角柱は跨踞する獅子の背の上に返花座を置いてその上に立つ。金鼓は謂はゞ鶴口型であるが、その耳鈎は位置高く口の空きが大きく、兩面は機かに兩鈎の部及下方一箇所に於いて相附くのみ、兩鈎面各々中央に八葉重瓣の蓮花あり、これを重圍三匝し、その外區中區共に蓮花蔓草文を現はす。臺座はもと白石であつた由であるが今は木製である。

我々は先この鼓架として四龍を用いた構想を讚歎する。細長い身にして鼓を抱くべく立ち上る勢あり、面も彎曲する處にその特徴あつて架たるべく、尾に物に絡む強い力あつて倒れざるべし。かくて龍にして始めてその役目をよく果し得るのであつて、龍頭のこれを莊嚴し、音響や鱗文の自然にこれが裝飾となるのも面白く、圓盤寶珠を挿ぐり處にも無理がない。左右各々を雙龍にしたのはそこに複雜の美を求めた上に、單龍なればその身の細長く一本立ちにして招くべき不安を除く爲めなるべく、尾の柱に絡むにも四龍にして更にしつかりと感せられるので、その四本の尾と八本の足とが交錯纏繞したあたり最も複雑の美を發揮し、又それより上方のすべてを安固たらしめて居る。踏踏忿怒する獅子亦よくこれを承けるのである。恐らく彼上の製作なるべく唐朝工藝の粹を表はすものである。たゞ金鼓はその彫刻文様に見るのに、精技のほど龍や獅子に於ける

て、初め阿彌陀三尊、不空罽索觀音等の諸像を安んじて居たのである。又維摩居士、文殊菩薩像を置いて維摩會の本尊とし、こゝに於いてその修行を見るのが當であり、よつて維摩堂とも呼んで居たのである。本像は治承炎上の像の後を承けて、惟ふに建久年中に成つたものであつて、その造られるのに先つて、その當時の佛師界に二對流を作して居た七條佛所の院尊と三條佛所の明圓との間に互にその作者とならうとする争のあつた後院尊によつて造られたと言ふそのものであらう。寺記また傳へて院尊の作とする。院尊は彼と同時に活動をして居た康慶、運慶、快慶、定慶等が彫刻界に革新の風を起した間に在つてなほ定朝以來の遺風を守るもの、この事實は今本像に於いて明らかになされるので、その伏し目な柔和な御顔細密な螺髮、寛ろいだ胸間、並行的な衣文、飛天光等にその消息が見られる。とは言へ定朝よりすれば遙か後れ、而もかくの如く佛師界に多年の傳統を打ち破る意氣の現はれた時であるから、その形式にも亦刀法にも力強いところがある。體貌豐滿となり、肉取り厚く、衣文細やかに作られて流動の趣を帯び、臺座低くまた堅固に作られて、そこに彫刻界の活氣のある一面を觀ることが出来る。而も形態整備その時代のこの種造像の極品として賞すべきものである。

七一、七二 本堂 千手觀音菩薩像 正面

本造 漆箔 立像

像高 一丈七尺二寸

今本尊像の東側に安置してあり、もと食堂の本尊であつたのである。食堂は和銅三年淡海公の建立と言ふ。堂塔の廢立の事繁い内に本堂も屢々その厄に遭ふ。本寺の食堂に最初から千手觀音像が本尊として安んぜられて居たかは不明だが、食堂に千手觀音像を本尊として置くことは例は少いが東寺などにもあり、又本寺古寺記に康平三年五月五日本寺堂上後治暦三年二月二十五日再興供養の時、千手觀音像一體を造つて舊の如く食堂に安置し奉ると記して居るから、多分相當古く或は最初からのことであつたのであらう。現今の像は治承堂上の後、恐らくは建久前後に成つたもので、寺傳に安阿彌快慶の作と言つて居る。

治承の兵火によつて東大興福二大寺の堂塔が殆んど地を拂ひ、これと共にその佛像の多くが灰燼に歸した後やがて兩寺ともにその第二紀元とも言はれるほどの大きな再興の機運に接したことは當時の彫刻界に大きな刺激を興へたのであつて、定朝末流の類型化した造像を一轉化せしめようとして居り、又多く輩出して居た才能ある佛師達はその希望を果し得る好箇の機會に接したのであつた。兩寺の多くの再興像は總て彼等の手に委せられたのであり、彼等は能くその業を成し得たのであつて、その事實を我等はその後度々の乘上によつてその業績の大半は失はれたであらうと思はれる現狀に於いて見ても明らかになし得るのである。それならばこの時に彼等の實行したことはどのやうなものであつたか。曰く、彼等の考も亦その時代精神と同じく、又奈良朝の古寺の復興の業に適はしく

復古と言ふことであつた。即ち定朝以後取得し得た技巧を身に承け乍ら更に邁つて範を奈良朝に求め、そこに彼等の新しい解決を行ふのであつた。この故に彼等の最も熟視し研究したのは天平の彫刻であつた。その事實は我々が本寺の諸堂を巡るまゝに次第に現はれて來るのであつて、と言ふより早く今我々の前にある像もさうではないか。丈六觀手十一面立像、見上げれば人は直ちに唐招提寺金堂千手觀音像に思ひ及ぶ。本像は恐らく彼像を造つたのであらう。兩像は酷似して居る。とは言へこればかり摸倣しただけではない。即ち本像の作者は像の肉身や衣文にかの像の形容を寫しながらこれに寫實的手法を加へてこれを招提寺像とは異つたものとして居る。鎌倉時代に於けるかうした革新兩手法の併用は快慶が好んで行ひ又得意としたのであり、さうして本像は彼の作風に類し、これが快慶作と傳へられることを故なしとは出来まい。その形容整美、この巨像をよくかく纏め上げたところに又この時代の名手の作なるを思ふものである。

七三、七五 東 金 堂

全景 外部組物
内部内陣構架
七四西面 扉扉 扉四本 本瓦葺
壁面彫刻 四十一尺四寸四分
壁間 七十六尺九寸五分

旅澤池畔から石階を北に登つて南大門の跡を過ぎ、して東すれば東金堂あり。堂は西面して前に花の松を控へ、遙か南開堂に對す。五重塔は直ぐその前に隣して聳えて居る。

本堂は初神龜三年聖武天皇が元正天皇御病平癒の奉爲に御建立

あらせられた處と傳へる。樂師三尊を本尊とする。寛仁元年塔に雷火が起つた際にその延焼によつて灰燼に歸す。爾後永承建立寛治焼失、永久建立治承焼失、應永建立の歴史を経て居る。即ち現在のものは應永廿二年の建立に係ると言ふのである。

七間四面最初は五間四面、七間の中南寄北寄各の一間、四面の中南寄北寄各の一間の柱間は孰れも中の間よりも狭い。又前方一列の柱はその兩端のものを除いては皆露柱となつて居る。その兩端の柱は即ち各その後方の柱と壁で繋いで居る。さうして第二列柱からが室内となるので、室内は南北東各側一間通りが外陣である。内陣壇上には本尊金銅樂師三尊像を安置し、十二神將、文殊菩薩、四天王等諸像を配して居る。

構造は和様で三手先に造り小天井支輪を備へ二重垂木である。そのプラン構造部分等に古式を備へる所の多いのは本堂がその度々の焼失にも拘らず、その再興建立の際によく舊形に則つて来たからで、前面一列の柱を露柱としたことはかの唐招提寺金堂の例に類ふもの(今その南北面が閉ざれて居るがこれも始めは吹き放されて居たのではなからうか)その大きな構へも莊重なプロポーションもよく古時の様子を傳はしめる。而もよく建立當代の様式を語るあり、今は本寺諸伽藍の中最大の殿堂として境内を雄視する概がある。

なほ本堂は萬壽四年以降修二會の道場であり、又殊に中世以降は本寺が我が國宗教界に重きをなす所以である。維摩會の法筵の敷か

れる所として特に注意せられるべきである。

七六

東金堂 本尊樂師如來像 正面
銅造 坐像
像高 八尺九寸

七七、七九 同

左脇侍日光菩薩像 正面
銅造 立像
像高 八尺四寸

七八、八〇 同

右脇侍月光菩薩像 正面
銅造 立像
像高 八尺五寸

東金堂本尊に就いては諸寺縁起集、收載本寺縁起中に樂師丈六佛像一軀、日光脇侍菩薩二軀とあり。七大寺巡禮記に當堂本尊樂師者、蘇我大臣建立之山田寺本尊也、丈六金銅樂師三尊云々、又興福寺巡禮記、東金堂條には本尊金銅樂師如來坐像、御長八尺、春日興福寺流記曰、上古本尊者、寬仁元丁巳年六月廿二日夜、雷落五重寶塔燒之、次除災及東金堂成、灰燼依長者殿下、仰佛師定朝造云々、其後又燒失、中古本尊樂師者、蘇我大臣建立之山田寺之本尊也、丈六金銅樂師三尊安置東金堂也云々、(山田寺、武寧、其後燒失、又應永廿二年、河内鑄師奉鑄之、脇侍、日光菩薩、各立像、御長七尺五寸、右二尊共漢土之作)と傳へて居る。さうして現在のものは巡禮記所載のものに當つて居るのである。東金堂本尊が中古山田寺から將來されたことについては又諸寺縁起集中山田寺條講堂に樂師丈六銅佛、(日光脇侍菩薩像)とあつて事明らかなや

うである。その山田寺から將來せられた中古とは何時のことであるかは山田寺の記録を尋ねても不明である。鑑鸞記によれば定朝の遺佛の焼失した後であらうがこのことが寛治が治承かそれ以前からかでないが、いづれにまれば應永より早く移され且又火に遭ひ、それが應永廿二年に再興造せられたものが現在のものであると傳へるのである。又本書の古文書中に「應永廿二年卯月十三日東金堂本尊御頭奉歸了。無爲無事。廿五日今日東金堂本尊御身奉歸了。大都無爲少分湯不届之所有之。日中以後牛玉奉入」とあつて、更にこのことを補遺するに足りる。

又その兩脇侍像に就いては鑑鸞記には漢土之作として應永改鑄は中尊だけとしてある。然るに今その像を見るのに、その全體の形式は一見樂師寺金堂脇侍像等に於けると同様であるが、熟視すれば全く似て非なるもので、そのやゝ伏視して腰を捻り、一方の足を僅か踏み出して息らふ容姿に、かの樂師寺像等奈良朝のものに見る如うな優麗端正の趣を缺き、顔面や體軀にまたかの豐滿の相がない。これを部分的に見れば寶篋の形も樂師寺東院堂の聖觀音のものに似てまた非、その束ね方も明らかならず、その飾目だつた毛髪も彫らみを現はすことなく甚だ固く、その化佛日光月光といふのにいづれも化佛を附すは解し難い、髪を生へ際上になくて髻に密著するものも奇その背光の線の過文も甚だ弱い。而相は最も奈良朝のものに於ける雄偉な趣とは隔絶し、著衣の袈衣の行き交ひ、その彫りも到底かれ等古像と較ぶべくもなく弱く、全くこれ本尊像と同じく應永年度

に於ける擬古の製作と鑑せられる。日光菩薩の蓮座のみは古物らしく思はれる。

- 東金堂 十二神將像
木造 著色 立像
- 八一 毘羯羅大將像 正面 像高 三尺九寸
 - 八二 招杜羅大將像 正面 像高 三尺九寸五分
 - 八三 眞達羅大將像 正面 像高 三尺九寸
 - 八四 摩虎羅大將像 正面 像高 三尺九寸二分
 - 八五 波夷羅大將像 正面 像高 三尺六寸五分
 - 八六 因達羅大將像 正面 像高 三尺九寸
 - 八七、八九 珊珉羅大將像 正面 上半身 像高 三尺八寸七分
 - 八八 額彌羅大將像 正面 像高 三尺八寸
 - 九〇 安底羅大將像 正面 像高 三尺八寸
 - 九一 迷企羅大將像 正面 像高 四尺一寸三分

九二、九四 伐折羅大將像 正面 頭部

九三 宮毗羅大將像 正面 像高 三尺九寸二分

これ等の十二神將像は東金堂本尊に侍立するものである。本堂建立當初或はそれより降つて平安朝に入つても神將像が置かれて居たか否な不明な。現在のものは鎌倉期に入つての作で、孰れも玉眼嵌入、その内波夷羅大將像にはその右足納外側に「文殊師利大聖尊 三世諸佛以爲母 十方如來初發心 皆是文殊教化力 爲臨終正念往生 極樂爲本加榮 色々狀如件」右足背底部に「建永二年四月廿九日榮色了」右足納底部に「花押之榮色」との墨書銘がある。こゝに加彩色とあるがその製作から推せば、これは直ちに本像の造像銘とすることが出来る。その十二神將であるのに銘文中樂師像にでなく文殊菩薩に歸依して居るのは本堂に維摩會本尊文殊像の安置してあるのによるのであらうが、變つたことである。今本像を見るのに十二軀はみな作者を異にするかとも思はれる。その姿態服裝等に變化がある上にかく作風を相異するため、やゝ統一を缺く點があるのを免かれない。而も十二軀を通じて認められる一作風こそはこれ正しく興福寺流ともいふべきものである。十二神將像の上世の遺品は尠く奈良朝のものは新樂師寺像、滋賀縣伊香郡高時村樂師堂像あり、平安朝製作のものは藤原期に入つて廣隆寺のもの、又本寺に藏し後に掲出する板彫像があるのに留つて居

る。鎌倉時代以後になつては數多きに屬して居るが秀作尠く、室生寺像、榮山寺像、斑鳩寺像の如きも未だ優品と云ひ難く、この内にあつて本寺のこの像は巖然頭角を現はして居る。尙山城法界寺像は本像に倣つて作つたもので、本像の右に注意せられ推賞せられて居たことを語つて居る。

- 東金堂 十二神將像
板彫 著色
- 九五 毘羯羅大將像 全形 像高 三尺三分五釐
 - 九六、九七 招杜羅大將像 全形 上半身 像高 三尺二分
 - 九八、一〇〇 眞達羅大將像 全形 頭部 像高 三尺一寸
 - 九九、一〇一 摩虎羅大將像 全形 上半身 像高 二尺九寸五分
 - 一〇二、一〇四 波夷羅大將像 全形 頭部 像高 二尺七寸七分
 - 一〇三 因達羅大將像 全形 像高 二尺五釐
 - 一〇五、一〇七 珊珉羅大將像 全形 頭部 像高 二尺一寸四分
 - 一〇六、一〇八 額彌羅大將像 全形 頭部 像高 三尺一寸九分

一〇九、一一一 安底羅大將像 全身

像高二尺九寸八分

一一〇、一一二 迷企羅大將像 全身

像高二尺九寸

一一三、一一五 伐折羅大將像 全身

像高二尺一寸

一一四 宮毗羅大將像 全身

像高二尺一寸二分

像に薄い木板で象つてあり、今これを木板に當て着け顔装として居る。像のみ古く、裏當て板と額とは共に後世のもので、もともこのやうな制を採つて居たか如何かは明らかでない。或は本尊の背後の壁面にでも並んでか、或は須彌壇の十二方の腰版板にでも附著させて居たか、或は又屏風のやうにでも柱立て、あつたのであらう。全形極彩色であつたので、多く剥落しながらその美しい著色や文様を又鍍金文様をも認めることが出来る。その製作様式から見ても、原時代前期の製作である。

その板彫であるところが甚だ珍らしく、その製作また甚だ注意すべきものがある。即ち今これを見るのに、一方にその全形に於いて立體的の趣を巧に表はして彫刻感を現はしながら、又他方に諸處部分的に平面的な捕捉をも面白く交へて居て、觀者をしてそこに立體的の影像を念頭に泛かばしめると共に全形としては立體彫刻にしては取り得ないやうな自由な姿勢を作り、而も方形な面の中に構圖

的に收まつて行く用意をして居る。又部分的には主として線の行き交ひに於いて裝飾的或は圖案的な象形をして繪畫的な興味をも併せ得て居るのが甚だ面白く見られる。さうしてこの浮彫像に現はれた形象の現はし方は藤原期に於ける立體彫刻に對する觀方と繪畫に對する觀方とを共によく現はして居る。即ち換言すればこの時代に於ける立體彫刻はこの浮彫像に於いてのやうに平面的に取扱はれて居り、又繪畫はこの浮彫に於けるやうに裝飾的分子を多分に含んで居る。そこに實に興味深い問題の潛んで居るのを思ふのである。

一一六—一一九 東金堂 維摩居士像 正面 頭部

像高二尺九寸三分 額高二尺六寸

像高二尺九寸三分 額高二尺六寸

像高二尺九寸三分 額高二尺六寸

本寺の維摩會のことに就いては前に記した如くである。その法會は維摩經により、その文殊師利問疾品に文殊菩薩が八千の菩薩五百の聲聞百千の天人に恭敬圍繞せられて維摩居士の方丈に問疾し、而も應酬問答することに象り、兩尊像を本尊とするのである。この經の我が國に早く渡來して尊崇を受けて居たことは、聖德法王の御疏のあるによつても知られるが、本寺のものは本寺の本願維摩原不比等の文殊足公が病篤かりし折、百濟の尼法明が疾病平癒の爲め維摩像を顯はし、維摩經を讀誦すべき由を説いたので、よつて同尼を講師として設會したところが靈驗があつたので、不比等が本寺を建立

するやこゝにこの會を設け、以後これを續修したのである。その時の本尊像は遺つて居ないが、和銅元年造立の法隆寺塔下東面にある維摩詰文殊菩薩の遺品によつて想像すべく、彼と同じく維摩文殊對質の形をとつたものであらう。さうしてこの法會は本寺講堂で修せられて來たことも既に記したが、講堂遷轉後は東金堂に於いて置かれたので、今こゝに掲げるものがその本尊像である。本像は寄木造、玉眼嵌入彩色の像で、その像内に興福寺東金堂 奉造立彩色等身淨名居士像壹尊 右自去建久五年正月月上旬之比受飯水之病患於閻浮生之無惡不仰佛陀之冥應者、淨除惡肝之勞苦哉、安空舍之靈像淨名居士寺門回藏之後、此像無人于造立、仍去三月廿二日、以當堂司加持良材巧僧始造、尊像同五月十五日造畢、首尾五十三日、終其功了、其後塗地彩色、五十日、雖爲速疾之營運、終之誠同七月五日、午、展供養之席、我願既滿、衆亦足早、依此善現身者、除病苦、保堅固、法華之松、等後世者、沈塵勞生、清淨佛刹之蓮臺、都四思共蒙斯善、三界同及此福、慧情之至冥衆、定照爲後、摩祖記、錄之狀、如件 佛師法師定慶 彩色法橋幸圓 御衣木加持堂司相譽 供養導師權大僧都法印大和尚位勝詮 建久七年四月五日、午、權律師法橋上人成口 依師主前大僧正法印大和尚位御命令舍利一粒、奉記之、と言ふ銘文が朱漆で記されて居て、もつて本像造立の由來及びその作者を明らかにして居る。今像を見るのに人は直ちに法華寺維摩像を思ひ起すであらう。本像は正しくかの像に倣つて作つたものと思はれ、鎌倉時代の彫刻家が好んで右彫刻に倣つたことをこれまた語つて居る。而もかの像に比

べて見るのに、作者は決して模倣に終らず、そこには又明らかに鎌倉時代の彫刻の特技をよく發揮し、病苦の内に法論を顯はしつゝある維摩の顔は遙か富實的のものとなり、衣襟の如きも時代的に整備して居る。その衣文に現はれた並行的であり、その起伏の甚だ平らかで、やゝ單調の趣さへ感せられる裝に彼の作の特色を見るものと言ふべく、それは運慶のものや快慶のものとは明らかに相異し、寧ろ康慶のもの——本寺南圓堂法相宗六祖像如き——の方に似て居る。その倚屏並に臺座は又甚だ工夫の迹の多いもので、殊に臺座に於ける裝飾的彫刻に於いて時代の好尚を遺憾なく現はして居るのが面白い。なほ本像の背後の倚屏臺上層裏面に墨書を以て、慈座一乘院方 長祿四年庚七月十八日 東金堂淨名四天內多聞天十二神之内成神彩色沙汰畢 繪所人數七人、小一、簡四、幡法眼尊忠、二、簡武藏觀盛、三、簡常陸定清、四、簡越前清春、五、簡民部觀盛、六、簡三河觀尊、七、簡出雲順と記し、後補を明らかにして居る。

一一〇—一一二 東金堂 文殊菩薩像 正面 左正側面

像高二尺二寸 像高二尺二寸七分

像高二尺二寸 像高二尺二寸七分

前掲の維摩居士像に對照するものである。これ維摩會の本尊たるべく又文殊會の主體である。本寺の文殊會は寺傳に承和年間から年々東金堂に於いて嚴修せられて來たと云ふ。今この像を見るのに、眉目に梵篋を置き、右手に如意を、左手を膝上に置いて、卷子介造

之を披り、身を甲で固めた上に着衣を著け、獅子座上に跏趺する尊容であつて、その睿智に満ちた童子形であるのも注意すべく、梵衲を頂き甲を著けるのは他に類を見ない。維摩會の本尊としての異相であらうか。その獅子座であるのは維摩經香積品に、居士が高廣嚴好なる獅子座を化作して、諸菩薩をその上に坐せしめたと云ふことがあり、又同經菩薩品に文殊菩薩が維摩居士と共に佛に見ゆるといふ條に、維摩即ち神通力を以て獅子座を執し、右掌に置て往て佛の所を詣すとあるのによつてかく作つて居るのであらう。像は寄木造、玉眼嵌入、肉身には金泥を塗り、赤衣、甲、草、光、背及び臺座は極彩色を施して、輪寶、獨結等の文様は盛上彩色にして、處々鍍金文様を置き、又獅子には玉眼嵌入、身には金箔を押し、美麗な莊嚴を施して居る。その作技を見るのに、維摩詰像とはたゞその老と幼と、居士身と菩薩身との對應による形相上の相異ばかりでなく、明らかに別子に出でたものである。その肉身の現はし方に於いても、衣裳の作り方に於いても、定座作の他の造像本寺梵天像、益田男藏帝釋天像等と較べて見ても、その間に距りがあり、この文殊像に於いては寧ろ運慶風が看取せられる。とはいへ、今違かにその作者を推し難いが、維摩像とは又同時に作られたものであらう。その形態整美、刀技に一絲亂れざるの概あるのを賞する。

東金堂 四天王像

木造 著色 立像

な體軀の如く部分に於いての象形すべて心力が凝積せられ充實する如き感あり、これに従つて像全體に溢るゝばかりに力が籠つて居る。その面貌は殊に謹嚴な威相があり、姿勢には持國天、廣目天に於ける如く、魁すべからざる沈毅の身構へあり、又增長天、多聞天に於ける如く、崇嚴武威官に天魔を降魔せしむるに足るものがある。又彩色文様がよく凝つて居るのも、殊しくその足下に踏まへられる邪鬼も、優れ總じて四天王像中の名品として推賞措く能はざるものである。さうして東寺講堂四天王像と又別趣あり、彼に於いて平安朝初期の新風を見るのに對して、これに於いて奈良朝以來の古風を稱すべきである。

東金堂 正了智大將像 正面

木造 立像

この像呼んで正了智大將と言ひ、金光明最勝王經中に現はれるもので、西大寺にその草創の頃作られて居るが、稀見の尊像である。當堂に古くから安置せられて居たので、寺記によれば、寛仁年間寺家炎上の時自ら猛火中から踊り出て、成を免かれ、寺中不思議のこと、驚異したが、永承の回廊には寺僧御首のみを取り出し、その後體軀を作り繼ぐ。又寛治三年二月五日の雷火に遭うたが、而も亦も不思議に半身已上灰中に残り、依つてこれに又作り繼いだ。永久年中要あつて他に移したところ本座に躍り戻つた。再三の奇異に崇信更にその深さを加へたが、治承の兵亂にも火中し、而も又半身已上は燒失を

一三三、一三六 持國天像 正面

像高 五尺二寸

一三四、一三五、一二七 增長天像 正面

像高 五尺二寸

一二八、一二九、一三一 廣目天像 正面

像高 五尺四寸

一三〇、一三二 多聞天像 正面

像高 五尺一寸

今東金堂増上の護法像として安置せられて居るが、堂は樂師如來の刹土で守護神としては既に十二神將像を配するので、古記にも當堂に四天王像のあることを記さない。併し他の何れの殿堂のものであるか、今これを明らかにしない。

本像は一本造像全面は乾漆で蓋はれ、又諸處に相當厚く盛上げられ、それによつて部分の形が調へられて居る。即ち木心乾漆式の造像である。眼目は極玉を嵌入する。この造像法からして本像は大體平安朝も早い頃のものと云ふべきであるが、今その形相を見るのに體軀は肥大にして莊重、この點に於いては本寺北圓堂の四天王であり、もと大安寺に在り、弘安年中本寺に於いて修復せられた延暦十年の造立であると言ふ彼の像と共に最もその特徴を著しくするもの、正暦年中の作かと思はれる法隆寺講堂のものはこれに似てや、輕い。手法様式亦この延暦像と正暦像との間に居て、そこには本像の製作年代を考へしめるであらう。そのづんぐりとした太短か

一三四 東金堂 釋迦如來像 正面

木造 漆箔 坐像

一三五 同 釋迦如來像 正面

木造 漆箔 坐像

二軀各寄木造、孰れも今東金堂の東寄外陣に並び安置してある。その傳來は明らかでない。兩者はその大きさ、容姿さてはその面貌と言ひ、衣文と言ひ、又その肉取りや衣文などに現はれた手法と言ひ、すべて酷似して居る。強ひて比較すれば、前者が後者よりすべてに亘つて強味を有つて居るのであるが、兩者は殆んど藤原時代後期に於いて殆んど同時に定朝流の相似た作家の手に成つたものと言つても差支へない。共に風姿瀟灑、本寺に現存する丈六像中最も右いものである。又優品である。

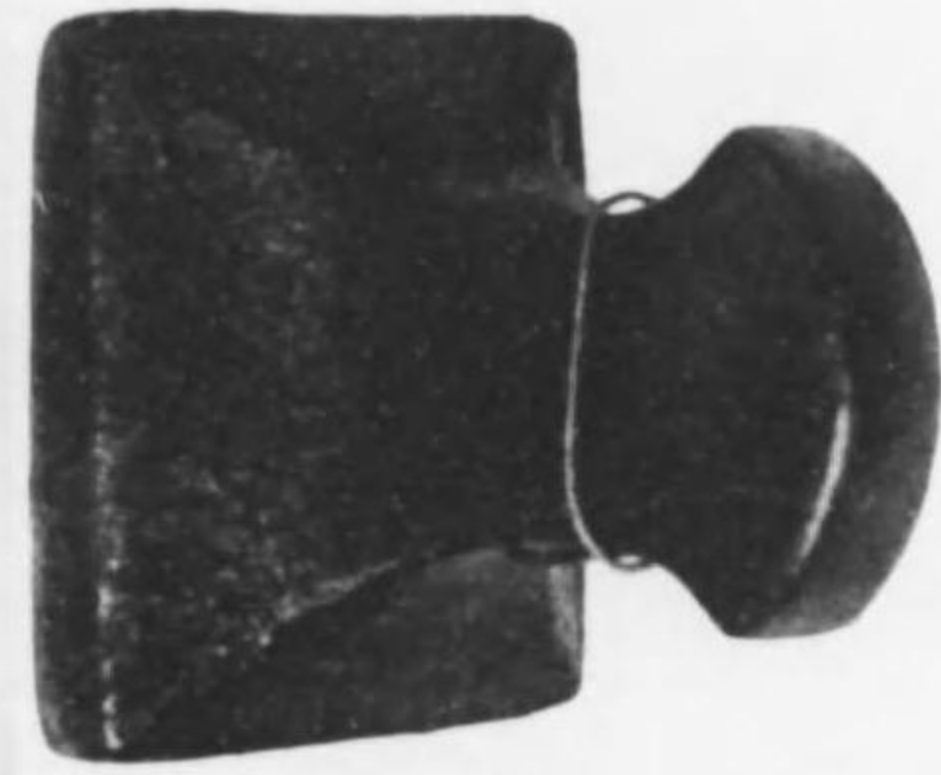


PL. 1



PL. 2

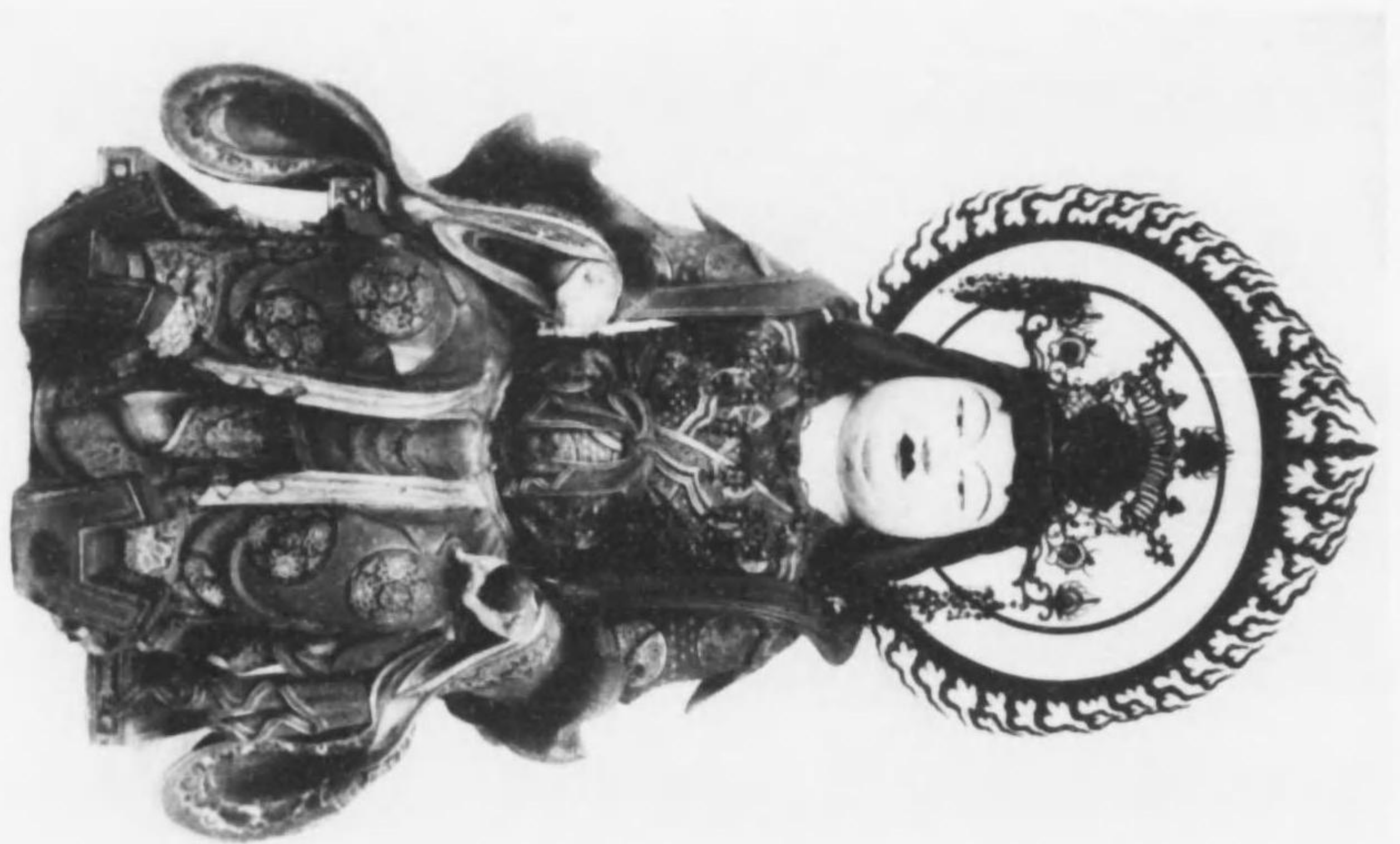
三ノ宮 本堂



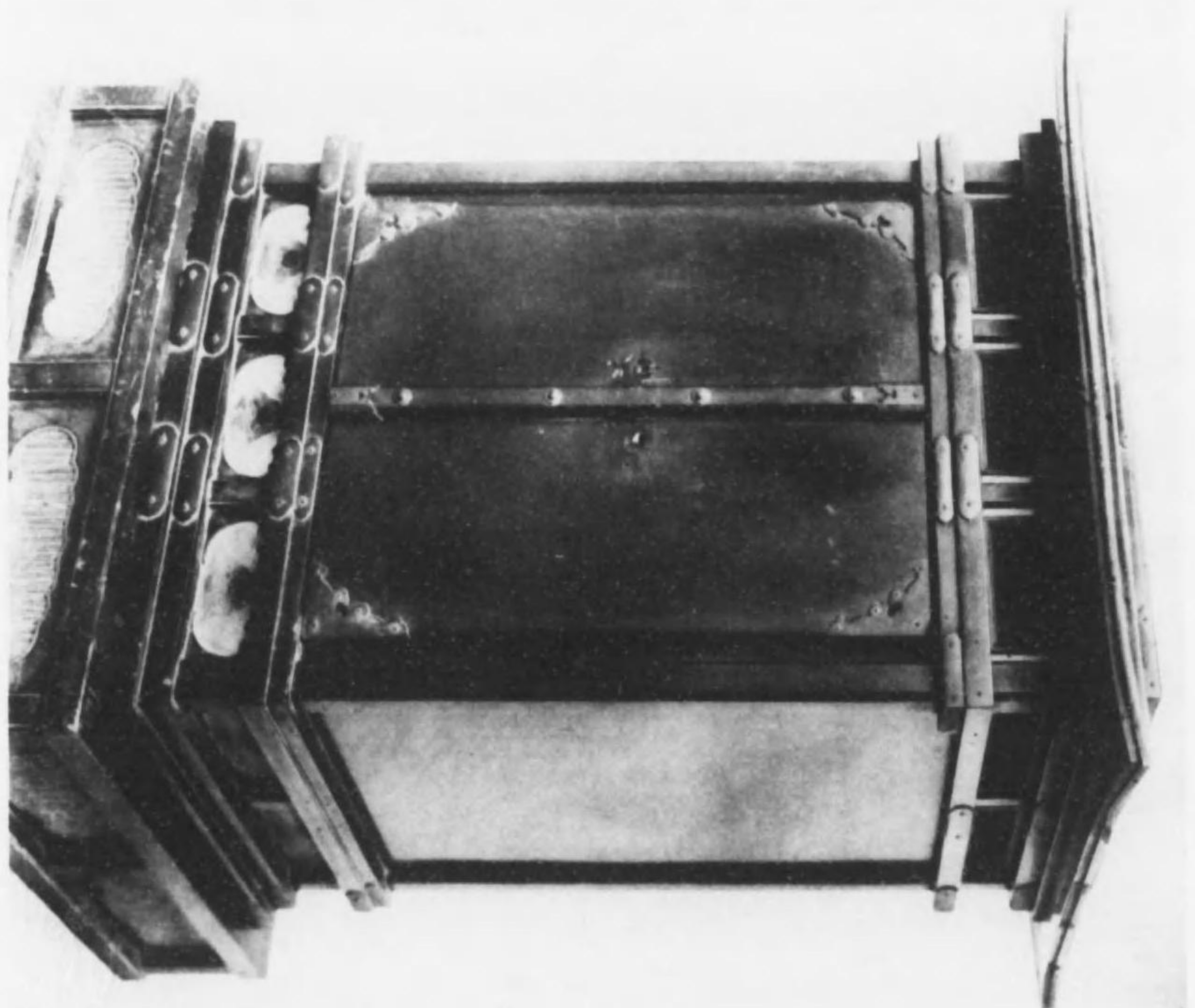
PL. 3

PL. 4

10



PL. 6 佛 像 尊 嚴 像



PL. 6 佛 像 尊 嚴 像

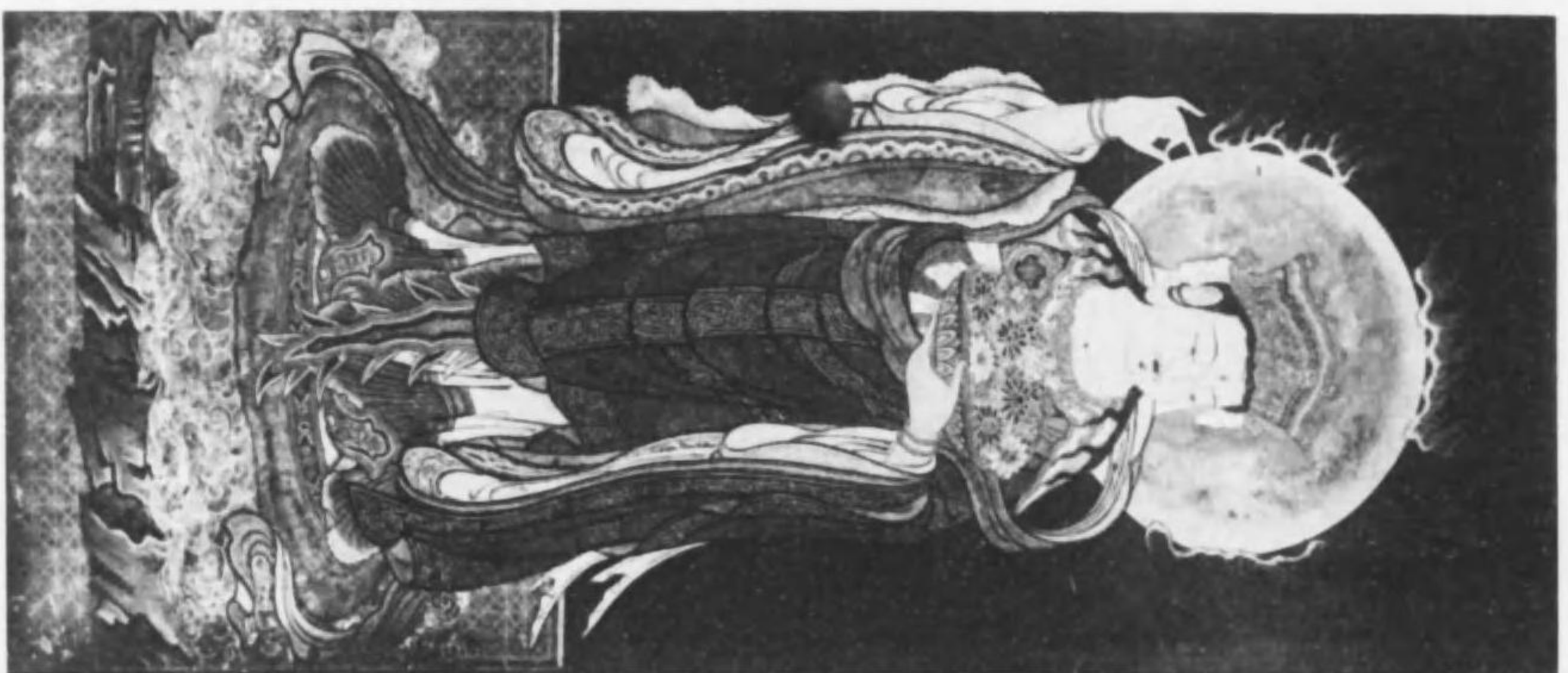


PLATE I. THE LADY OF THE MIRROR.



PLATE II. THE LADY OF THE LOTUS.



PL. 9

487 377 24



PL. 10

佛菩薩像 五尺高 日本



PL. II

佛天菩薩 坐式四 壹本



PL. 12

毘沙門天



PL. 13 觀世音菩薩



PL. 14 觀世音菩薩



PL. 10 普賢菩薩像 雲木



PL. 15 聖德太子像 雲木



PL. 18 像佛刹舍 子弟天十 空本



PL. 17 像佛刹舍 子弟天十 空本



PL. 20 阿彌陀佛坐像



PL. 19 阿彌陀佛坐像



PL. 22 後醍醐天皇 子孫太子 變本

PL. 21 後醍醐天皇 子孫太子 變本



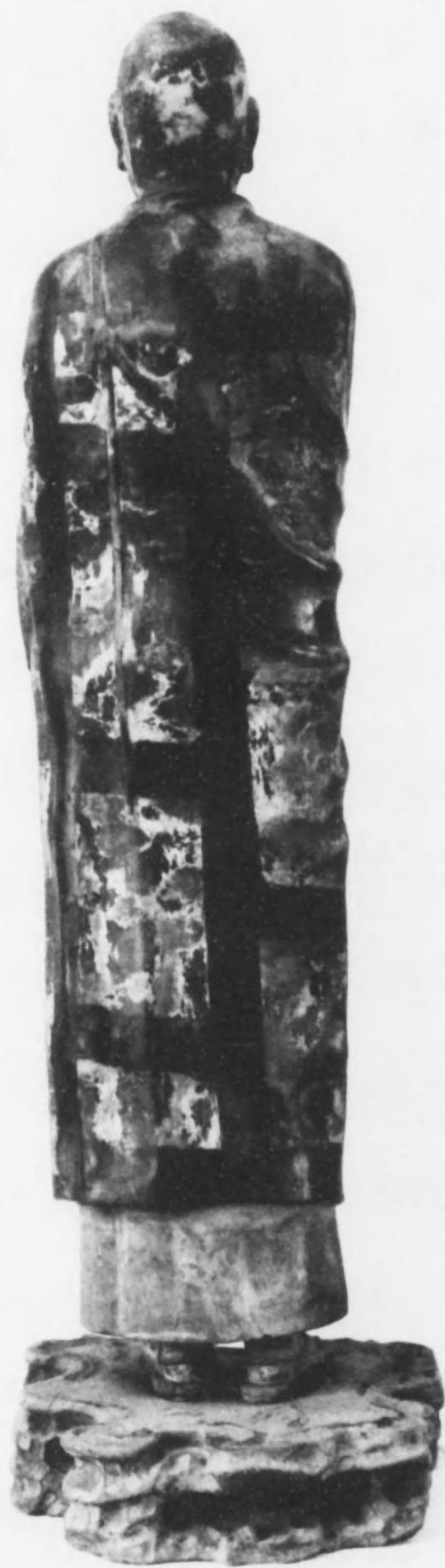
PL. 24

MEMPHIS 7041-58



PL. 23

MEMPHIS 7041-54



PL. 26 後醍醐天皇 丁卯九月 坐像



PL. 26 後醍醐天皇 丁卯九月 坐像



PL. 26 龍形様富子大士 坐木



PL. 27 龍形様富子大士 坐木



PL. 29

SMITHSONIAN INSTITUTION



PL. 31 後醍醐天皇 子孫太子 坐像



PL. 30 後醍醐天皇 子孫太子 坐像



PL. 32

佛坐像 于南七十 空本



PL. 33

ARMOR OF A WARRIOR



PL. 34

阿育王像



PL. 36 觀音菩薩 全身像



PL. 35 觀音菩薩 全身像



PL. 36 佛羅羅迦 美猴王 空本



PL. 37 佛羅羅迦 美猴王 空本



PL. 39

佛首像 莫高窟 西魏



PL. 40

佛首像 莫高窟 西魏



PL. 41

觀世音菩薩





PL. 43

保藏館 文部省 文庫





PL. 45

0000000000



PL. 47 後背圖 菩薩像 全身



PL. 46 正面圖 菩薩像 全身



PL. 40

法安頭陀 雲南六 雲南



PL. 60

後醍醐天皇 聖德太子 坐像



PL. 49

後醍醐天皇 聖德太子 坐像



PL. 51

佛頭部 卷之三 全本



PL. 53 後醍醐天皇 聖德太子 坐像



PL. 52 後醍醐天皇 聖德太子 坐像



PL. 54

佛 阿彌陀佛 像



PL. 55

後(神)上(力)神(會)堂(本)



PL. 57 漢(前朝)上方阿彌 泥本



PL. 56 漢(前朝)上方阿彌 泥本



PL. 56

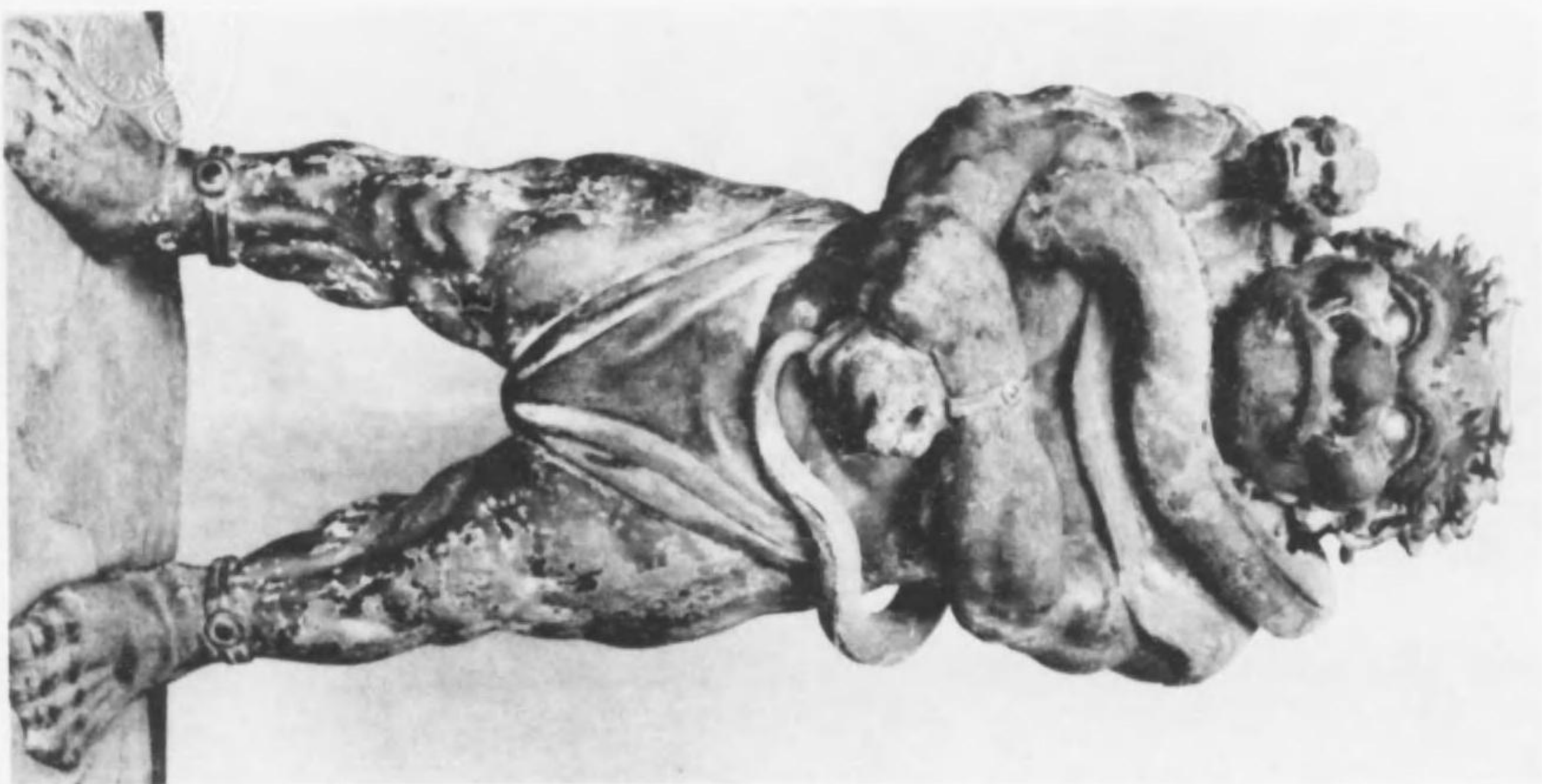
APHRODITE



PL. 60 天燈臺 象形



PL. 59 天燈臺 象形



PL. 68 3 2 17 25 5



PL. 69 3 2 17 25 5





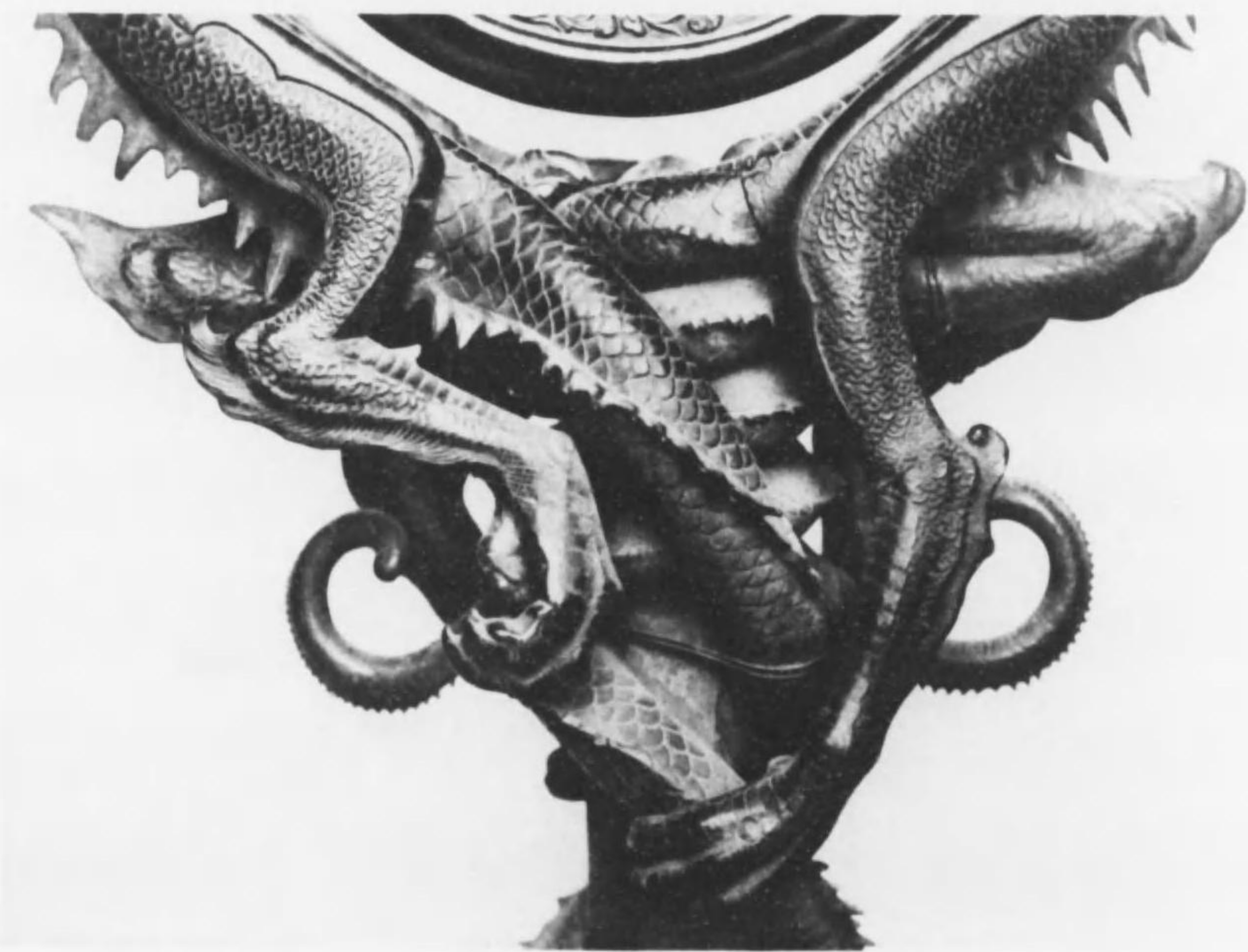
PL. III

PL. III



PL. 65

龍門亭



PL. 66

龍門亭



PL. 67

卷之三



PL. 68

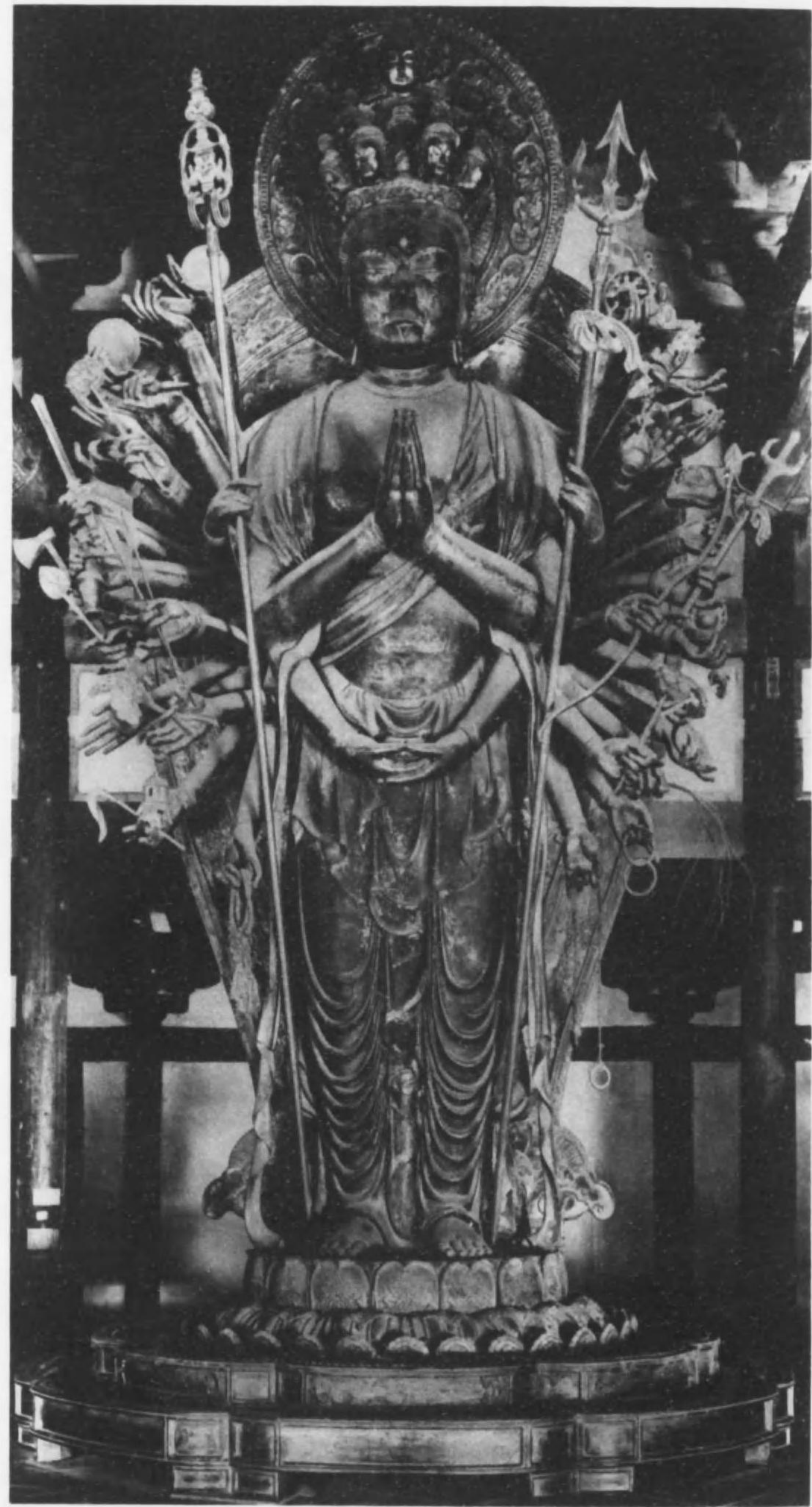
卷之三



PL. 69

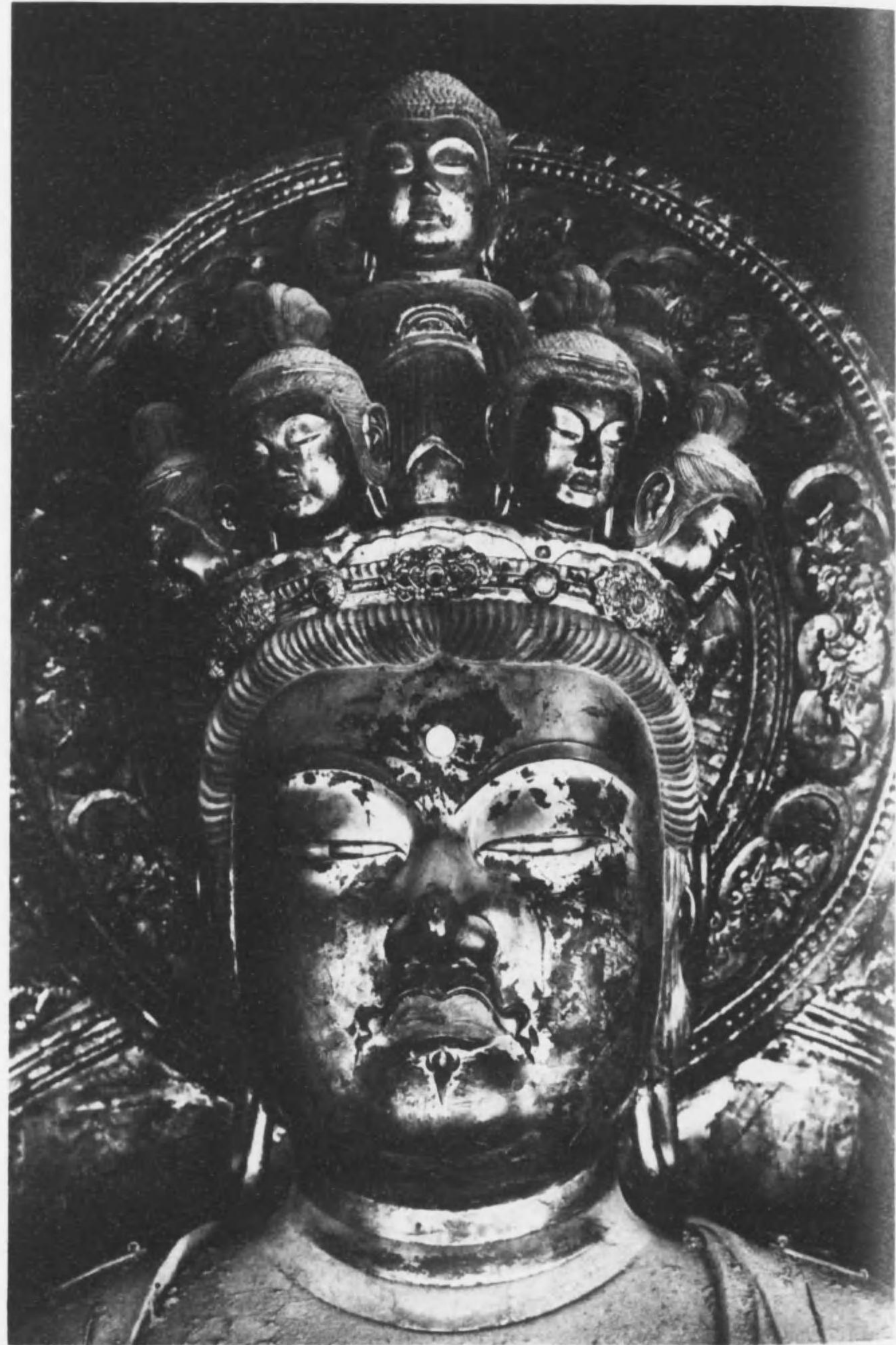
興福寺 石燈籠





PL. 71

像菩薩千尊

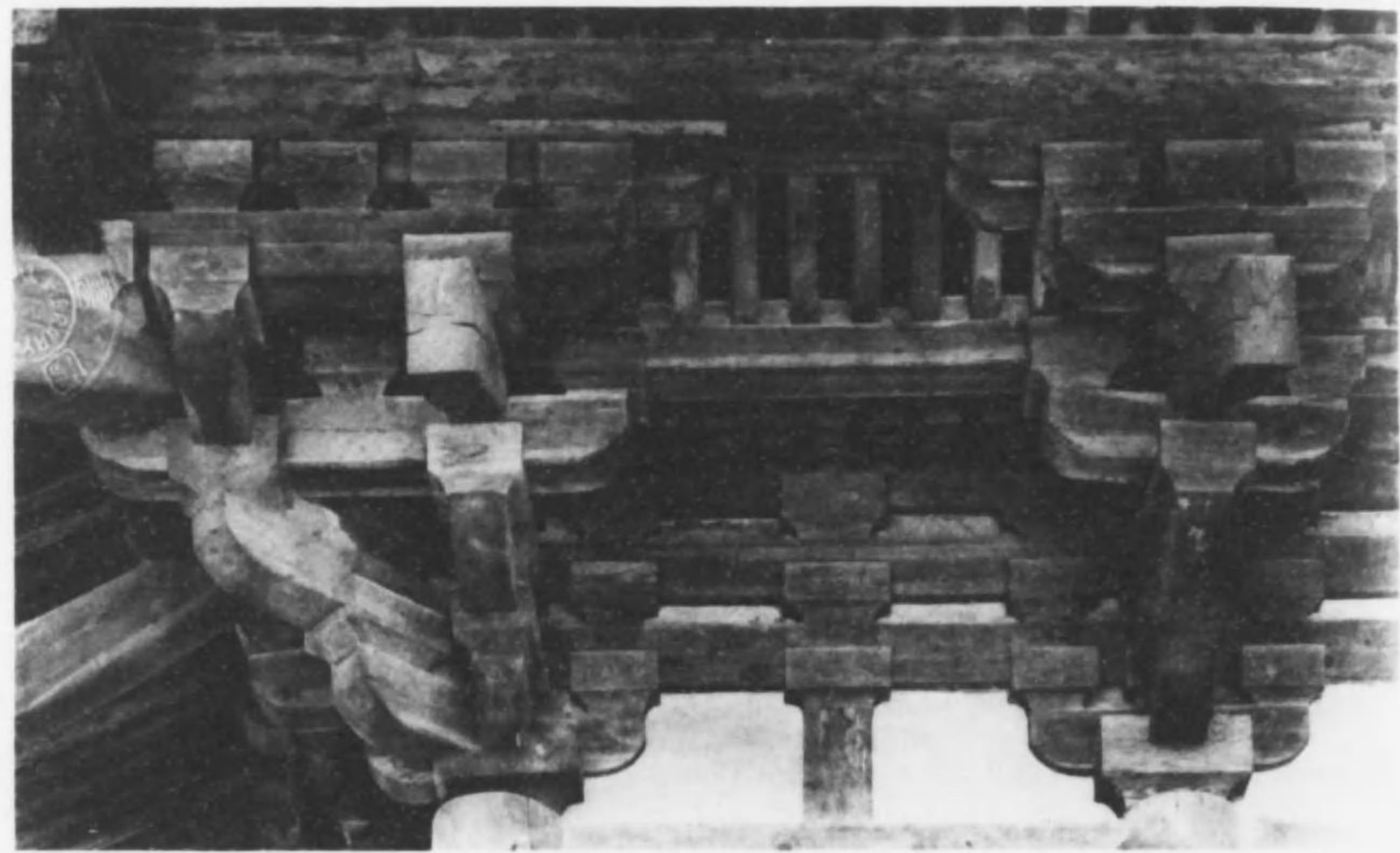


PL. 72

佛龕佛坐

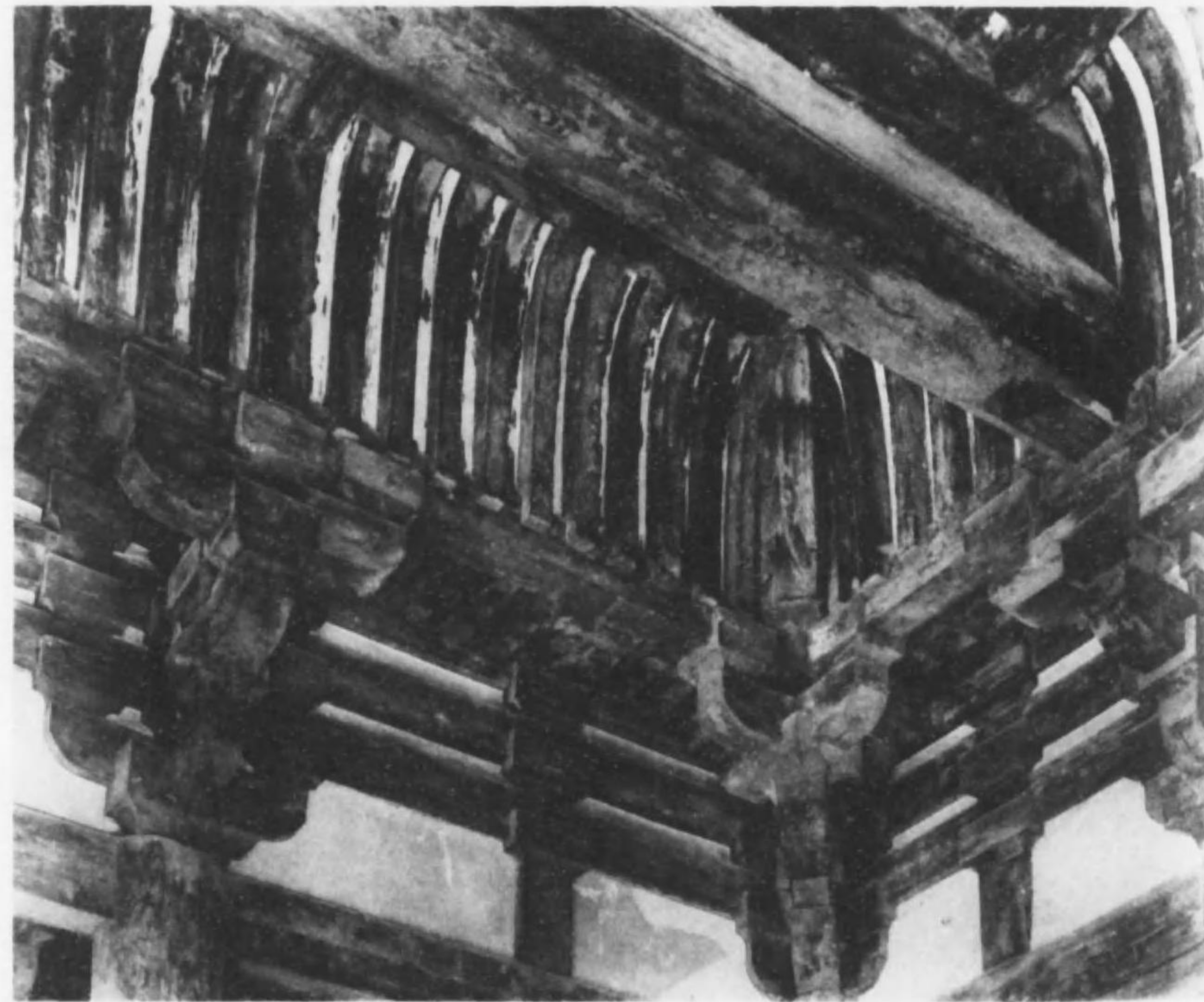


PL. 111



PL. 74

外檐斗拱



PL. 75

内檐斗拱





PL. 76. 聖観音菩薩像 904



PL. 77. 聖観音菩薩像 904



Fig. 50

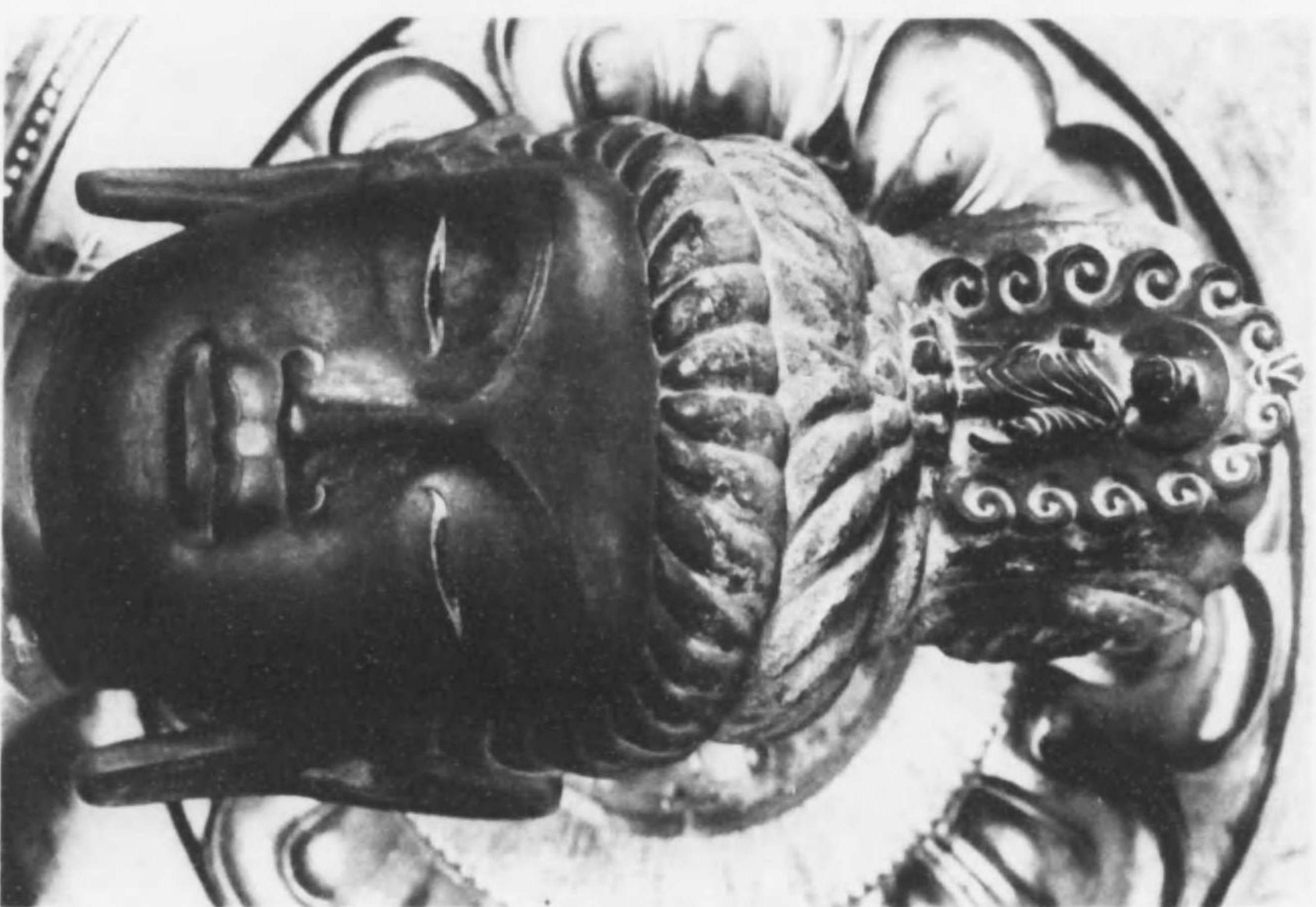


Fig. 51



PL. 02 善財童子像



PL. 01 善財童子像



PL. 04 藏傳佛教之護法神像



PL. 03 藏傳佛教之護法神像



PL. 86 釋迦牟尼佛



PL. 85 釋迦牟尼佛



PL. 66 毘沙門天像 高 一 尺 二 寸



PL. 67 毘沙門天像 高 一 尺 二 寸





PL. 91 聖持菩薩 持杖 全身像



PL. 90 聖持菩薩 持杖 全身像



PL. 92 聖徳太子像



PL. 92 聖徳太子像



PL. 94

石造の佛の頭部



PL. 96 像持大羅尼尼 持神 二 文全在



PL. 95 像持大羅尼尼 持神 二 文全在



PL. 97

佛光大藏經 卷之三



PL. 99 像持大羅士尊 碧輝二十 安金北

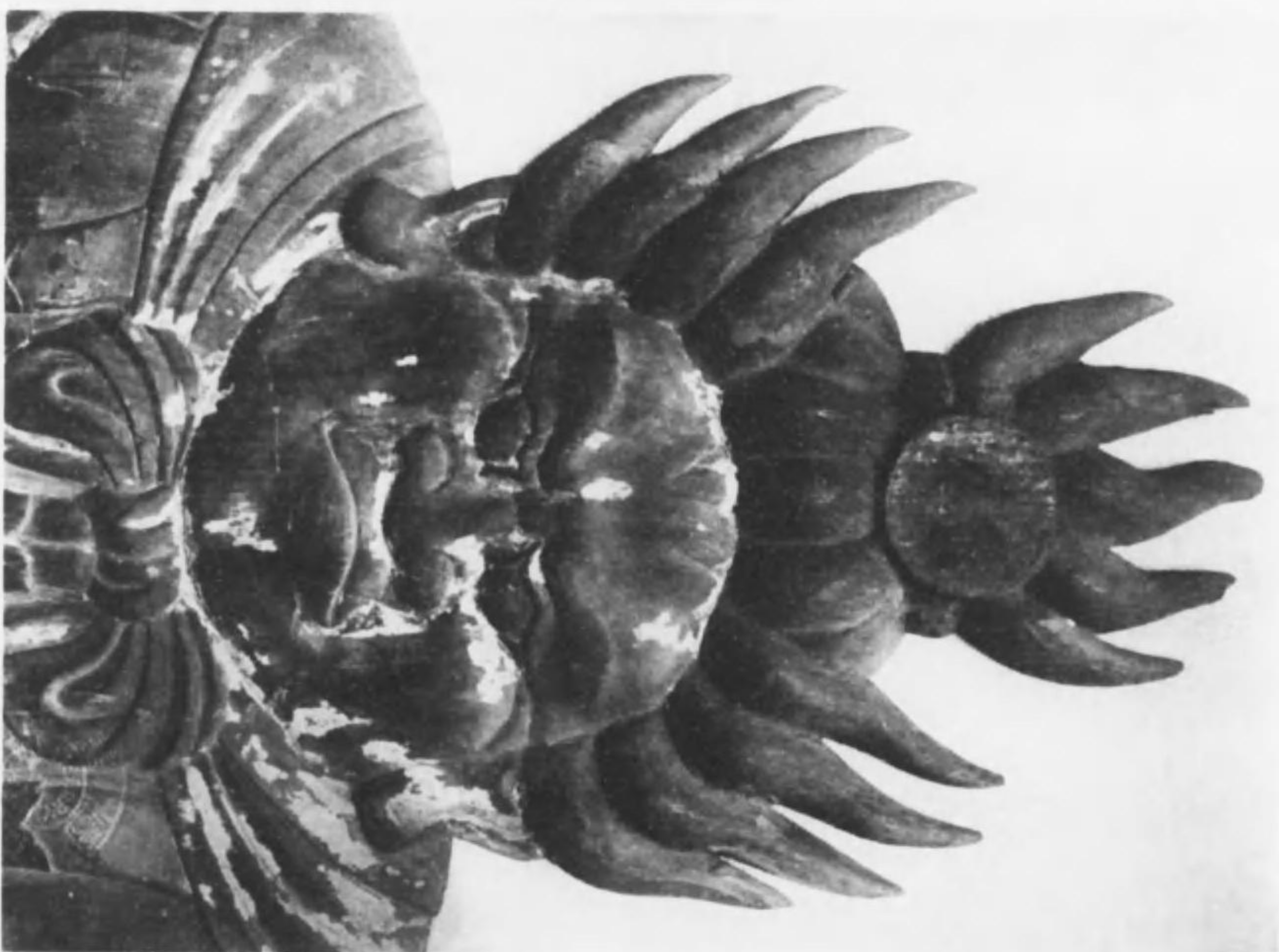


PL. 98 像持大羅士尊 碧輝二十 安金北



1000 1000

1000 1000



1000 1000

1000 1000



PL. 103 聖持菩薩像 唐 27 聖金剛



PL. 102 聖持菩薩像 唐 27 聖金剛



PL. 104

佛頭像 寶冠 空全像



PL. 106 東大寺藏 聖觀音菩薩像



PL. 105 東大寺藏 聖觀音菩薩像



PL. 107

BRONZE FIGURE



PL. 106

東大寺南大門の力士



PL. 110 漢代大羅金剛 菩薩二十 全身像



PL. 109 漢代大羅金剛 菩薩二十 全身像

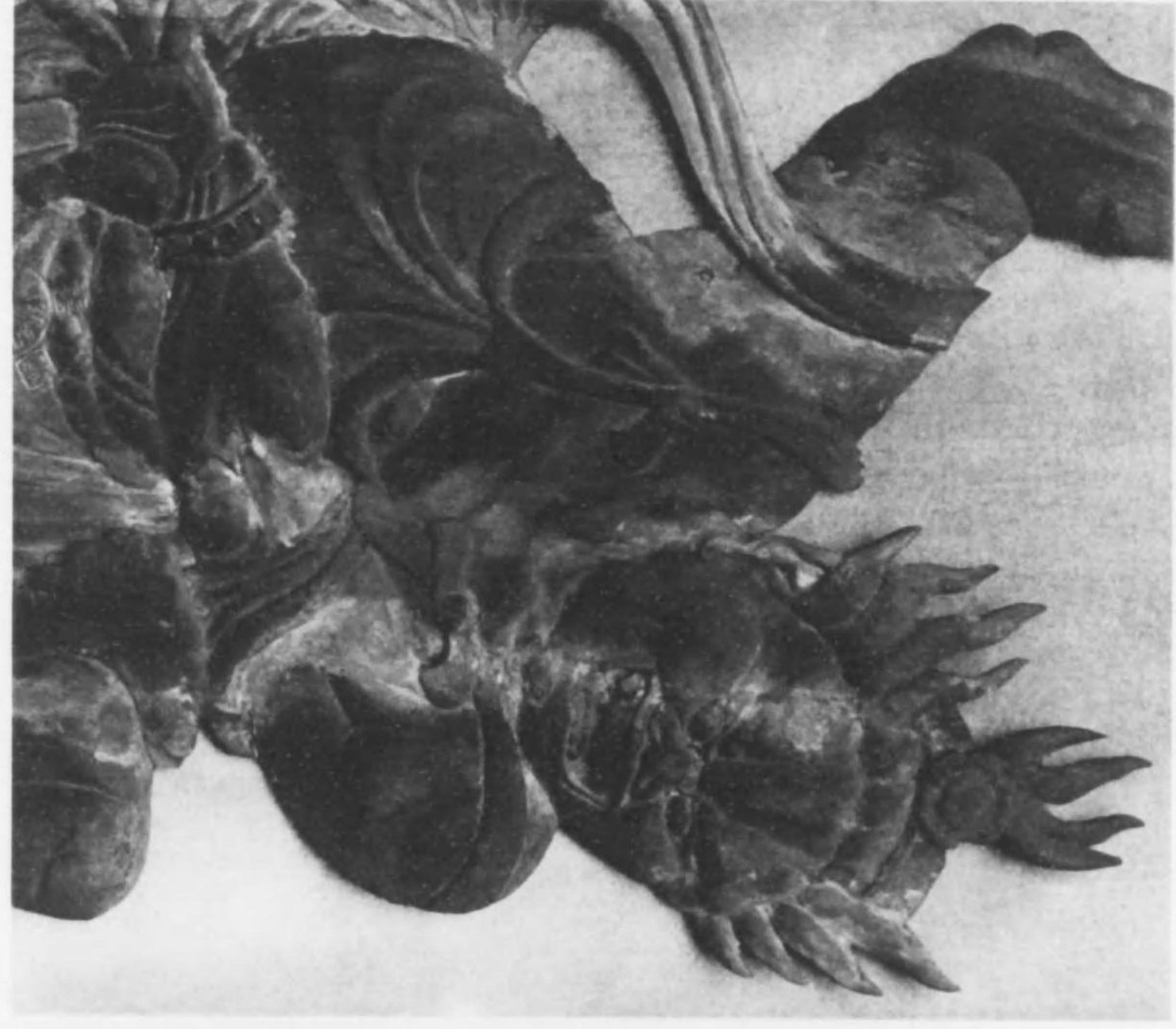


Fig. 10

Fig. 10

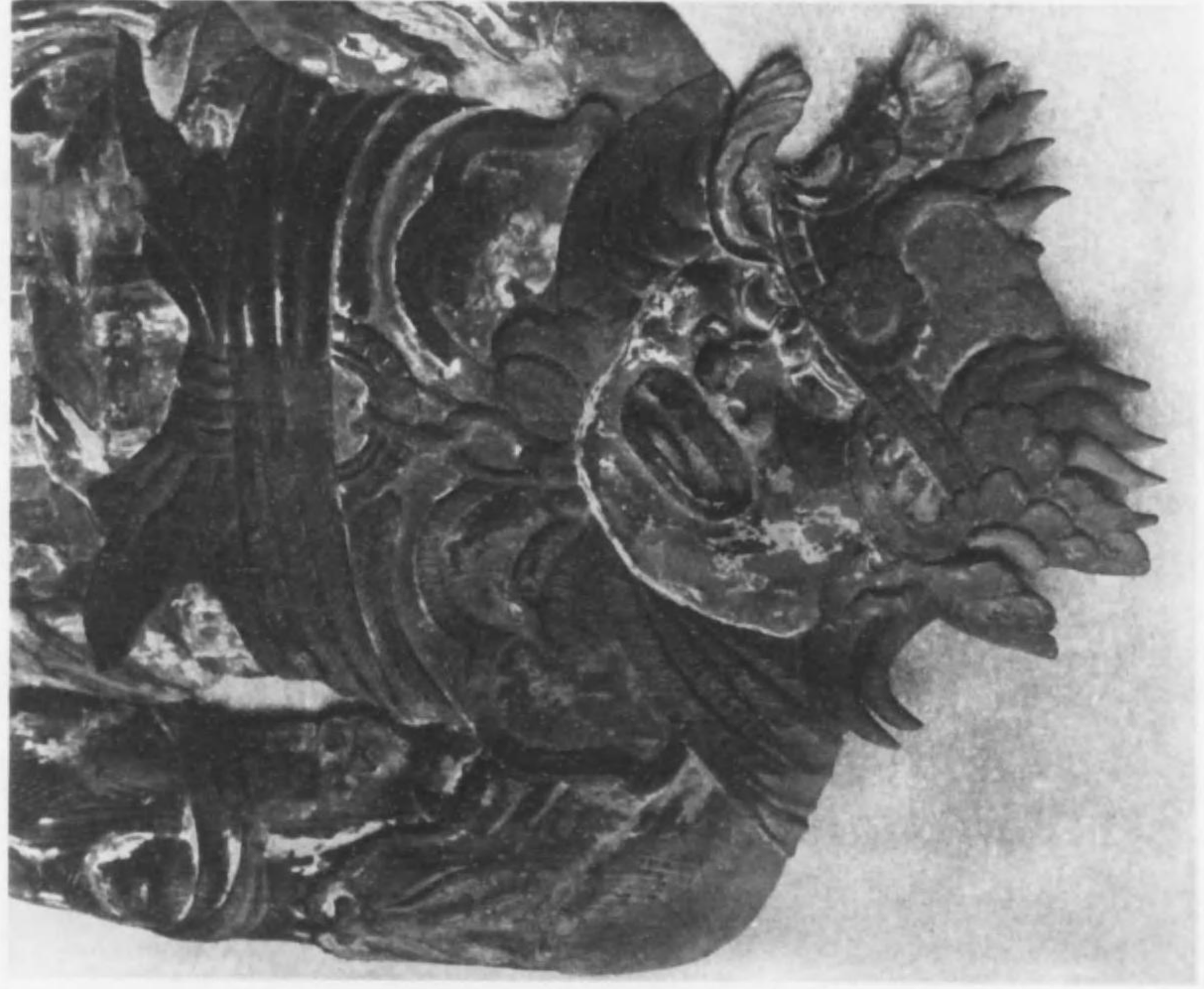


Fig. 11

Fig. 11



PL. 114 阿闍梨大羅漢像 持劍 一 安金乳



PL. 115 阿闍梨大羅漢像 持劍 二 安金乳



PL. 115

SHARON ZATI 222



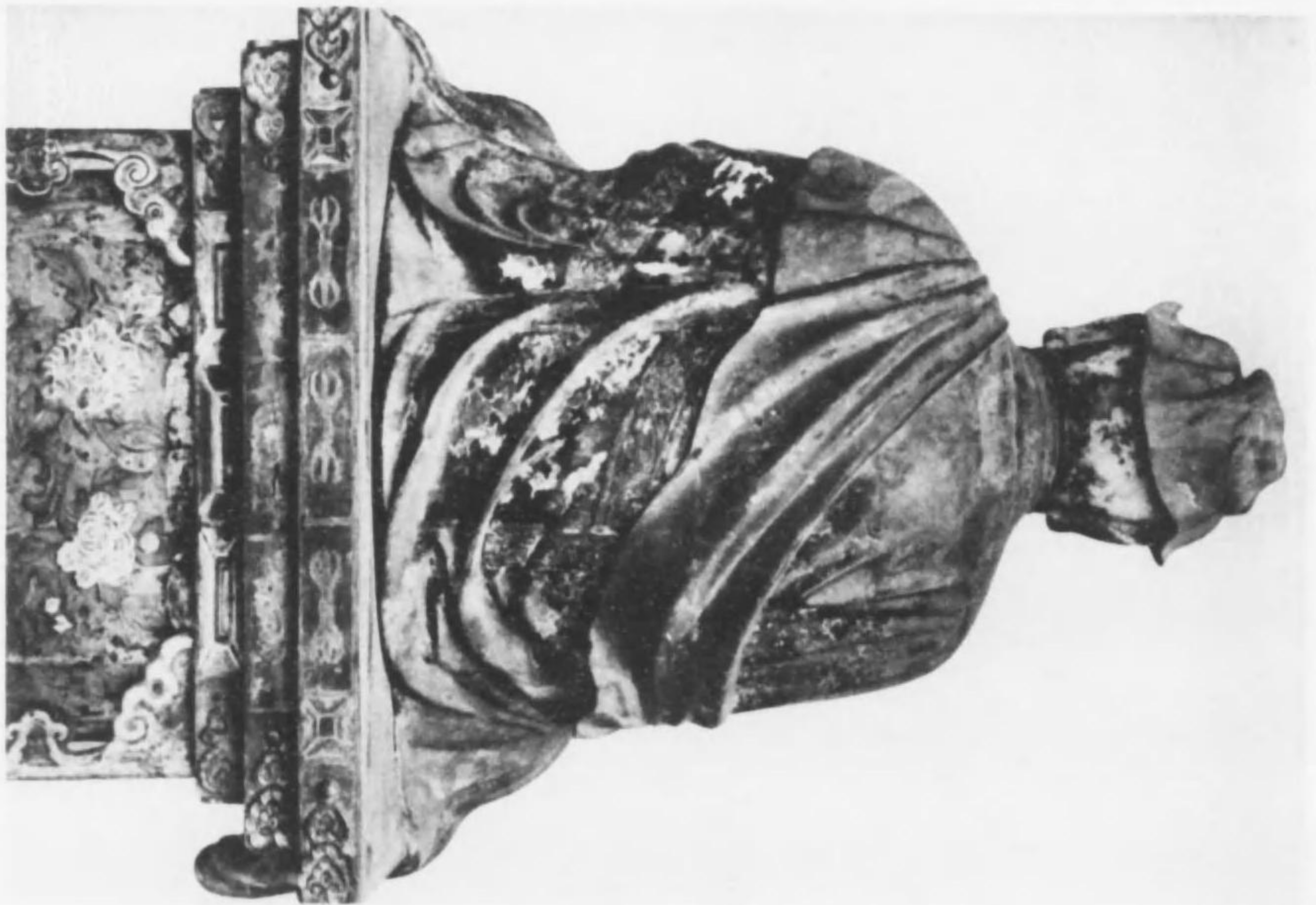
PL. 116

PLATE 116



PL. 117

南齐张猛龙像



PL. 119



PL. 118





PL. 122

佛龕七號本 200 號



PL. 121



PL. 123

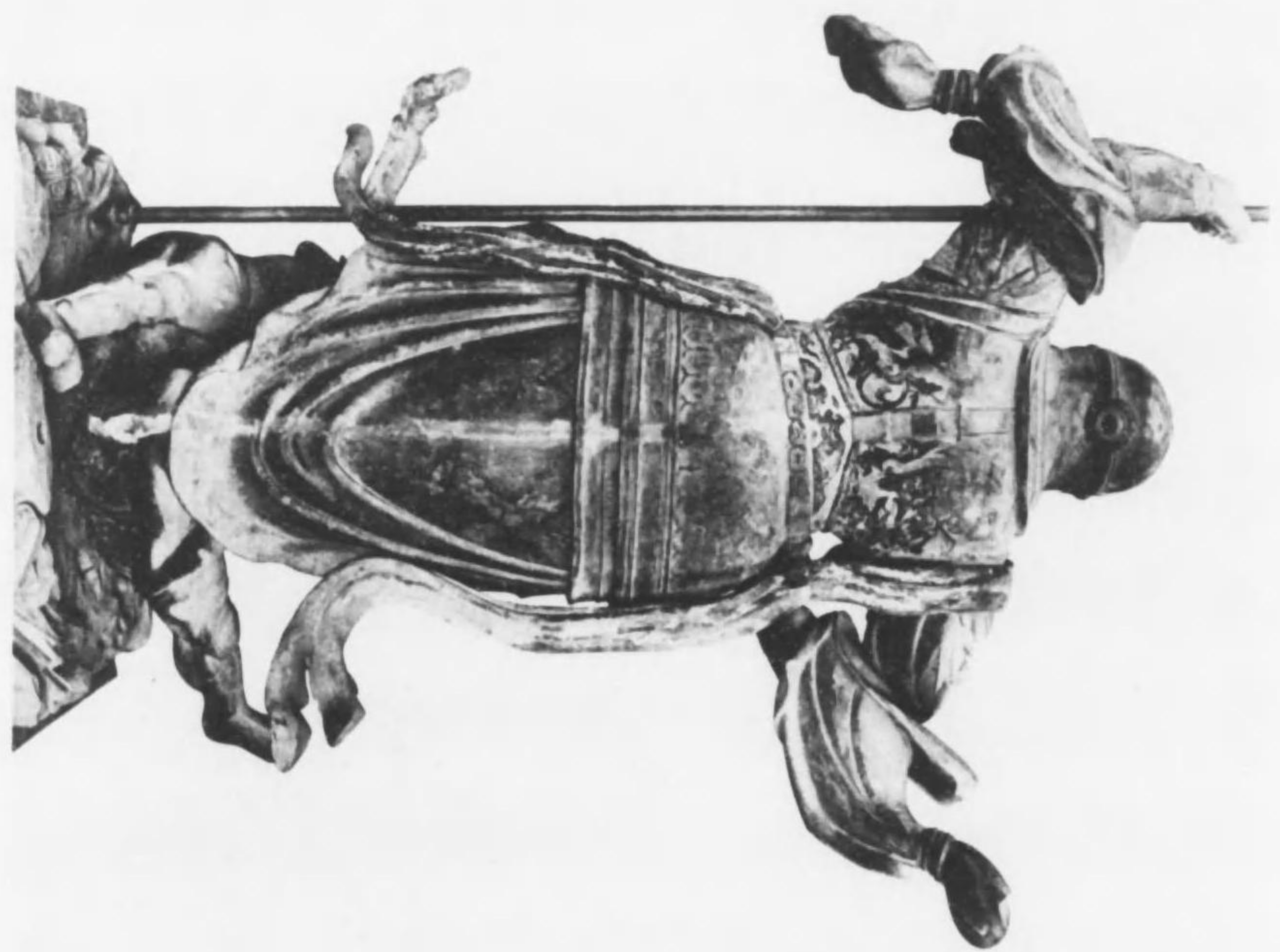
佛天護神 其天國 聖金成





PL. 125

石像 佛 像



PL. 127

東大寺 聖德太子像



PL. 128

東大寺 聖德太子像



PL. 120

唐代菩薩 持杖菩薩 全身像